流域の人々と歩む月刊誌

くまがわ春秋

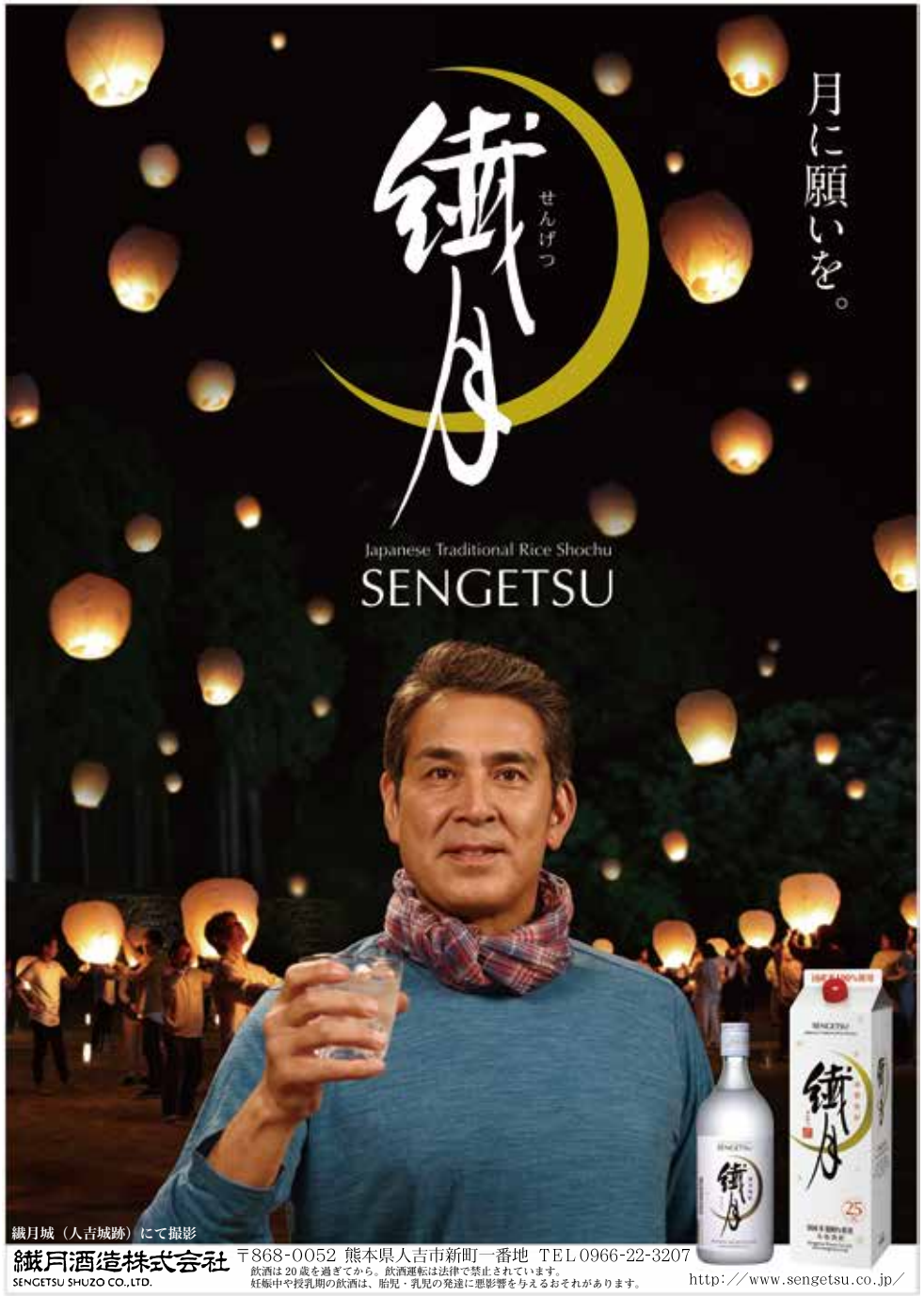
2017 11 第20号

坂本の製紙工場小史

山里の秋を行く（球磨村遠原） ©松本 学

月刊 くまがわ春秋 第20号 2017年11月15日発行
企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社 TEL 0966-23-3759 ／ FAX 0966-23-3759
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号 http://www.hitoyoshi.co.jp/ info@hitoyoshi.co.jp

定価 540円 本体500円



雑誌 81779−11-7
4910817791175
00500

最近のおもな出来事

10月15日（日）
▽第19回人吉ふれあい100円商店街（人吉市内中心市街地）
▽たらぎ音楽祭（多良木町・交流館石倉・えびす広場ステージ）
10月20日（金）
▽恵比須神社秋季大祭百十年祭「ゑびす祭り」（～21日、多良木・同神社周辺）
10月21日（土）
▽第64回人吉球磨総合美展（～26日、人吉市スポーツパレス）
▽ふれあいまつり〝くまむら〟（～22日、球磨村総合運動公園）
10月22日（日）
▽衆議院議員選挙 投・開票
▽石野公園まつり（人吉クラフトパーク）
▽人吉くま映文協 第105回名画会「冬冬の夏休み」（あさぎり町深田せきれい館）
▽大人の田んぼの学校in百太郎溝（多良木町多目的研修センターほか）
10月29日（日）
▽第15回球磨川幸福マラソン大会
▽人吉市役所麓町本庁舎閉庁式
▽人吉・球磨アマチュア無線災害ネットワーク発足
10月31日（火）
▽人吉ロケ映画「おじいちゃん、死んじゃったって。」上映会（人吉カルチャーパレス）
11月3日（金）文化の日
▽「さかもと国際児童画展」（～19日、八代市坂本町7施設）
11月11日（土）
▽ひとよし産業祭（～12日、人吉市ふるさと歴史の広場）

今月の一言

『文読む月日』（レフ・トルストイ編著 北御門二郎訳）より

人生問題の大多数が、代数の方程式のように解かれる。つまり、最も簡単な形に直すことによって解かれるのだ。

表紙写真

「山里の秋を行く」（球磨村遠原集落にて）

球磨村のお堂を巡る取材にお付き合いして、遠原集落まで足を延ばした。一面のススキや色づき始めた木々を眺め、しばし目の保養をさせてもらった。（み）さん、お疲れ様でした。

撮影／松本 学（編集部）

本誌の取扱店舗
■清藤書店■ブックスミスミ■明屋書店（錦店・免田店・多良木駅店）
■道の駅さかもと■ TSUTAYA 八代松江店

― 11月（第20号）目次 ―

巻頭言 桑原史佳／2
緊急ルポ 肥薩線の事故／18
瀬戸石ダム8回連続の「A判定」／20
漱石俳句⑳ いわさき楊子／22
記憶の落ち穂⑲ 坂本福治／23
駅・ものがたり⑳ 松本晋一／24
くまがわの神さん仏さん⑮ 宮原信晃／28
漢和字典は面白い③ 鶴上寛治／31
ジョージ・ルイスの足跡㊦ 宮川 続／32
上杉芳野の「あがっ段」⑱／38
山に行こうよ！⑨「山犬切」／40
建築みてある記⑮ 森山 学／41
くまがわすじの考古地誌⑭ 木﨑康弘／46
方言を味わう⑰ 前田一洋／50
「心がやすらぐ人吉・球磨」廣松洋一／52
おっとわっとあすび⑨ 松舟博満／55
小山勝清 生誕一二〇年特集⑨ 上田精一／56
福田さん「日本翻訳文化賞」受賞／58
「中二階の仲間たち」福田昇八／59
字図で見る球磨の地名⑲ 上村重次／64
倉敷便り⑪ 原田正史／67
くまがわ春秋歌壇 いもご短歌会／70
外来語から学ぶ英単語⑳ 藤原 宏／71
ひろしのげっかんぎひょう／71
マイ・文庫本「忘れられた巨人」白城松男／72
鶺鴒短歌会 九月詠草／75
湯前まんが美術館設立の頃④ 溝下昌美／76
映画観想記 久馬 俊／79
今月の秀句 永田満徳／81
くまがわ学習塾⑪／83
くまがわ狂句 村上鬼拳／84
前号【くまがわ学習塾⑩の答え】／87

坂本特集

さかもと国際児童画展・開催／3
大人の田んぼの学校in百太郎溝／6
先行上映 人吉映画祭り／7
荒瀬ダム撤去工事／8
坂本の製紙工場小史①上村雄一／12

巻頭言

Jアラート

十月末に童謡歌手・そが みまこさんのファミリーコンサートが錦町保育園・こども園保護者主催で開催された。その中で久しぶりに「里の秋」を聴いた。小学校の頃歌っていたなと、とても懐かしく聴き入った。私の中でこの歌は2番止まりで、親子でいろりで栗の実を煮ている秋の歌のイメージだった。3番の歌詞に入り、戦争の時代の歌なんだと遅ればせながら気づき、心の奥に残っていた。十月末にあった人吉映画祭りで「この世界の片隅に」を見て、映像の中で栗を煮るシーンはなかったものの、こういった状況の中で「里の秋」の情景のような家庭がたくさんあったんだろうなとしみじみ思った。

この歌の背景を調べてみた。日本が敗戦した昭和二十年の十二月二十四日に、復員兵や引き揚げ者の人たちを励ます特別番組に流す歌として作られたそうだ。当時の反響はすごかったらしい。

テレビ新聞等で「ミサイル落下」のニュースを聞いていても遠いことのように思っていたが、日本に落下する可能性がある場合の緊急情報を伝える「Jアラートを聞いて怖かった」「ミサイル落下時の避難訓練をした」と聞くと心穏やかではなくなる。

どうか緊急速報を聞くことのない、平和な世の中がずっと続きますようにと強く願いながら、平成から新しい時代が近づいてくる年末を少しずつ迎えよう。

（桑原史佳）

たくさんの「笑顔」　さかもと国際児童画展・開催

11月3日のオープニングセレモニー。描いた絵を披露する子どもたちとくまモン

地元保育園児の太鼓と秀岳館高校生のパフォーマンス

「笑顔」をテーマに国内外の子どもたちが描いた絵を展示する「さかもと児童画展（坂本住民自治協議会主催）が11月3日、八代市坂本町の7会場で始まった。

過疎化が深刻な町の活性化と、被災地復興を願っての企画で、約1300点の作品を19日まで展示する。

絵は坂本町内の7ヶ所で展示されている

お母さんやお父さんの笑顔、友だちの笑顔、動物の笑顔がいきいきと描かれていている。国によって肌の色、目の色、服装もちがい、来場者は熱心に見入っていた。

道の駅さかもとの展示会場

同町出身の上村美鈴さんがプロデュース。「子どもたち、来場者の笑顔に出会うだけ元気がでる。今回は第一歩。継続が大切」と話す。住民自治協議会の森下政孝会長は「元気のでる展示会。たくさんの絵を観ていただきたい。坂本町の魅力も感じていただけるだろう」と語った。

世界各国の子どもたちの絵

西福寺の展示会場には絵を描けるスペースもある

鮎帰集落に立てられた案内板

鶴之湯旅館

温泉センター・クレオン

「さかもと国際児童画展」 2017年 **11月3日（祝）～11月19日（日）**

◎会場【入場無料】
①道の駅坂本　②温泉センター・クレオン（木休）　③さかもと温泉・憩いの家（火休）
④球磨川温泉 鶴之湯旅館　⑤ 坂本コミュニティセンター　⑥ 鮎帰・西福寺
⑦ 西部多目的集会所

◎主催 八代市坂本住民自治協議会　◎共催 NPO 法人横浜青葉国際交流の会

◎後援 八代市教育委員会／八代青年会議所／八代市立坂本中・八竜小 PTA ／東京球磨川会／横浜市国際交流協会

◎問合せ　さかもと国際児童画展実行委　☎ 080-6534-4428　☎ 080-9140-0899
（検索：さかもと国際児童画展）

地元農家男性と交流　大人の田んぼの学校

球磨郡の歴史に触れ、体験などを通して農業の魅力を発信する「大人の田んぼの学校in百太郎溝」が10月22日、多良木町を中心に開催された。

このイベントは、水土里ネット百太郎溝（岡村文明理事長）の主催で、子どもたちを対象にした通常の田んぼの学校とは違い、大人を対象にした初の企画。地元農業を応援する意味で、男性農家と県内外の女性との交流を図り、球磨郡の農業の魅力を知ってもらうために開いたもので、地元農家男性16名、県内外から女性15名が参加した。

あいにくの雨となったこの日は、内容を変更して開催。JAくま上球磨営農センターでの開会式の後、百太郎溝の歴史を映像で学び、市田秀樹事務局長が土地改良区の役割を説明した。また南稜高校生の「暗渠排水の仕組み」についてと題した研究発表もあった。

その後は薪で炊くご飯炊きを見学し、百太郎公園に移動。同溝の歴史の説明を受け、町指定文化財の「百太郎溝取入口旧樋門」などを見学した。

午後からは多良木町の文化財探訪や梨狩り、バーベキューなどで男女が交流し親交を深めた。

八代市から参加したという30代の女性は「かんがい施設の大切さを知ることが出来た。薪で炊いたご飯が絶品だった」と語っていた。

百太郎溝取入口旧樋門を見学する一行

研究発表する南稜高生

薪と釜を使ってのご飯炊き

全国公開に先立ち上映　人吉映画祭り

昨年の夏、相良藩「吉組」など大勢の協力を得て人吉でロケを行った映画「おじいちゃん、死んじゃったって。」が、11月4日からの全国公開に先立つ10月31日、人吉市カルチャーパレスで上映され、市民ら約1000人が、人吉の風景と家族の物語を観賞した。

同作品は、若手気鋭の森ガキ侑大監督の映画監督デビュー作で、若手人気女優の岸井ゆきのさんにとっては映画主演デビュー作となる。今年開かれた第30回東京国際映画祭にも公式出品された注目作。

上映前には、森ガキ侑大監督と若手人気女優の岸井ゆきのさんが舞台あいさつ。県のゆるキャラくまモンから祝福を受け、地元の子どもから花束を受け取った。

上映会場での記念撮影

荒瀬ダム撤去工事

課題は山積している

10月27日、熊本県企業局は平成29年度の工事説明会を八代市坂本町コミニティーセンター（旧坂本公民館）で開催し、平成28年度の工事結果と平成29年度工事の概要を説明した。荒瀬ダムの撤去工事は平成24年度にはじまり、その都度、企業局は年度毎の撤去工事の予定案を住民に説明してきた。来年度は、撤去工事の最終年度で、今回が最後の住民説明会であった。

① 導水トンネルの埋め戻し

企業局の説明によると、堤体越流部の撤去作業はほとんど終了し、藤本発電所への導水トンネルの埋め戻し作業も完了している（写真①）。管理棟はすでにない（写真②）。調圧水槽、藤本発電所も今年中に完全に撤去される予定である（写真③、④）。ダム堤体の除去作業のため、総計66回の発破作業が実施された。外見をみても、荒瀬ダムはもはやダムでなくなっていて、ダムは撤去されたと実感できる（写真⑤）。

しかし、課題は山積している。

第一に、遺構を設置する計画の是非がある。企業局は、「地元の要望」を理由に、左右両岸の構造物（写真⑥）を遺構として残し、そこを公園化する計画を立案し、現在、国交省と交渉中である（写真⑦・図①・②）。遺構（公園）設置計画は当初の撤去計画になく、流域住民に対しては同説明会ではじめて示された。企業局は「地元の要望」を免罪符として強調しているが、どの経路を通じて、どのような要望が出されたのかは説明していない。遺構（公園）自体に反対する住民も少なくない。遺構を要望した住民がいるとしても企業局案の遺構を希望しているかは不明である。

② 管理棟の撤去

③ 今年中に撤去予定の調圧水槽

④ 藤本発電所の撤去工事

⑤ 本体の撤去工事が終わった荒瀬ダム（10月末）

企業局が構築物（公園）の予定地として計画している場所には駐車場はなく観光地として活用できる見込みはない。特に右岸の予定地は自動車の離合も難しく、観光地化は不可能である。取水口跡地の駐車場化案が地元住民から提案さ

れたが、企業局は駐車場の管理予算の発生を理由にこれに否定的である。

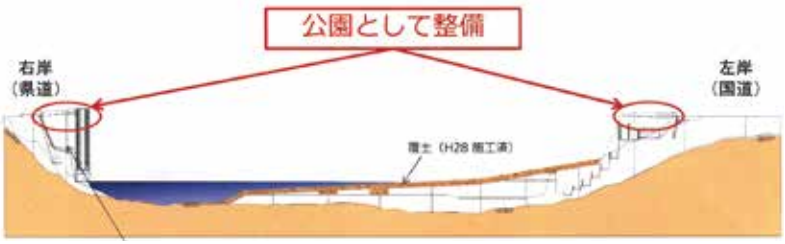
第二に、右岸遺構予定地は水の流れを変化させ予想外の災害を発生させるのではないかという疑問がある。企業局は流量７０００トンの場合をシミュレーションし、流れを変化させないと断言した。しかし、シミュレーションの正確性について説明してはいない。土木事業では、シミュレーションの結果を事業案の正当性を示す根拠として強調するときが多く、今回はその一例にほかならない。「シミュレーション」という妖怪が跋扈（ばっこ）しているかのようにみえる。その有効性は否定しないが、それを絶対視してよいというわけではない。人間の脳は小さく、自然のメカニズムを完全に把握できない。水の流れは殊に複雑で、シミュレーション通りにいくとはかぎらない。アインシュタインは、流体力学は難解で、計算式をつくれないといった。名言である。アインシュタインを持ち出さなくても水の流れが複雑であること、その分析が極度に難しいことは誰でも知っている。シミュレーションとちがう結果が発生したときには、決まって「想定外」の弁明がもちだされる。しかし、「想定外」の時代はもはや終了した。

第三に、土砂の供給問題がある。上流に瀬戸石ダムがあるため、同ダム下流には上流の土砂は供給されない。水だけが流れ土砂が供給されないとき、下流では「深ぼれ」が発生し、最悪の場合には、両岸の崩落をもたらす。この点について企業局は、堆積土砂が約10万トン残っていて、現在、それを自然流下させている、道の駅坂本附近の状況をみるかぎり、自然流下によって土砂の均衡は維持されているのではないか、土砂供給については電源開発株式会社が適切に対応するのではないかと説明したが、「深ぼれ」は現実に発生している。この問題は企業局の独自の力で解決できないので、これ以上、これに触れないが、今後の最大の課題である。

その他にも多数の課題がある。魚族の回復など50年単位で考えなければならない問題もある。構造物として荒瀬ダムは来年度中にはなくなるだろう。しかし球磨川再生の観点からみるとき、ようやく方向性がみえてきたばかりである。（春秋）

取水口の撤去作業

⑥ 左右両岸の構造物



⑦ 企業局が立案した左右両岸の公園化計画

説明会で質問する地元住民

維新150年を考える
坂本の製紙工場小史（1）

上村雄一

社会の土台である経済的側面に注目するとき、明治維新は封建社会から資本主義社会への移行の画期をなすもので、そのプロセスを分析することは、球磨川流域に住むわれわれにとっても重要な課題である。そこで、ひとまず、八代市坂本町の製紙工場に注目することにする。同工場は、県外資本の力を借りずに県内資本を中心にして設立された熊本県内で最初の近代的工場で、会社名を変えながらも昭和63年（1988年）9月30日までの90年以上にわたって存続し、地域経済に多大な影響をあたえた。加えて同工場は日本製紙八代工場の源流で、八代工場は坂本工場の分工場として出発している。以下、坂本工場の歴史を概観する。

創業当時の東肥製紙坂本工場（明治 31 年）

四人の男

明治28年（1895年）12月1日、熊本市役所に4人の男が集まった（熊本市は明治22年4月1日に発足）。

ひとむかし前であれば、この四人が熊本市役所の一室で顔を合わせることはなかった。幕末・維新を通じて熊本県は政争が激しく、工業化が遅れていた。なにかあれば、いつも、どこかで党派的な騒擾（そうじょう）が発生し、ものごとはなにも進まなかった。幕末に細川藩が力を発揮できなかったのも党派対立に一因があった。神風連の乱、西南の役にも党派の争いが影を落としている。

党派対立は学校党と実学党の対立に由来するが、両派内の対立・分裂のほか、肥後勤王党の動向も加わり、その全体的流れを整理するのは容易ではない。だが、坂本工場を考察するためには、これを無視できない。たとえば、十条製紙株式会社坂本工場『東肥製紙株式会社社史』（昭和28年2月28日）1頁は次のようにいう（以下、『会社史』と略記する）。

「由来熊本には二つの思想の流れがあった。ひとつは国権党他は自由党で、保守派の民政党になり、進歩派の自由党が政友会となった。この二大政党は選挙はもとより、凡てについて党派根性を露呈して、県下に思想上の融合一致がなく、就中その影響は実業界にも及び、従って何一つ見るべき企業が生まれなかったのは理の当然である。」

『会社史』のいう国権党は学校党、自由党は実学党の系譜に属する。工場建設は資本の集積・集約の一定の進捗を必須条件にするが、党派の争いがそれを妨げてい

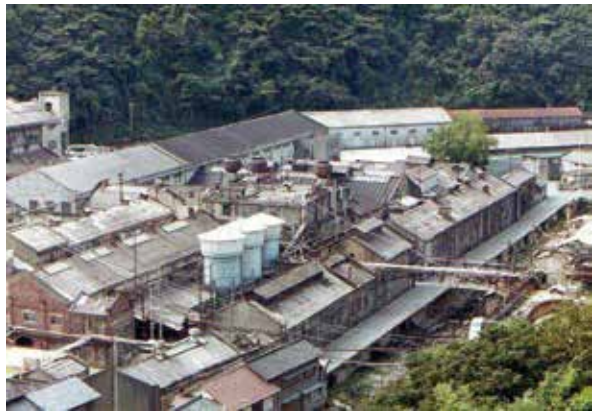
《実学党と学校党》

天保 14 年（1843 年）、長岡（米田）是容・横井小楠は、藩校時習館のありかたに不満をつもらせ、独自の勉強会（解読会）を開くに至った。時習館の教育内容は古文解釈にとどまる訓詁学にとどまっている、学問は実益と結びついていなければならないとの疑問が両者の出発点であった。是容・小楠らはしだいに力をまし細川藩内の一大勢力になった。これに対して次席家老・松井章之が（八代城・城主）が対抗し、章之派は学校党とよばれるようになる。両者の対立は時習館の教育方法についての対立にとどまらず、実質的には、権力闘争であった。筆頭家老と次席家老の伝統的（因習的）権力の差は大きく、結局、是容は失脚し、学校党が明治維新にいたるまで支配権を掌握した。学校党は小楠にも圧力を加え、武士道失脚事件などを通して細川藩内で小楠は居場所を失った。小楠は維新時に力を回復し、それにともない、維新後は学校党に代わって実学党が支配権を握るが、その後、学校党が勢力をもりかえし、両者の対立は坂本工場建設後も長くつづいた。小山勝清の父・文郁は国権党員で県会議員を2期つとめているのであって、『在る村の近代史』を読むときにはで文郁の政治的立場を十分に考慮する必要がある。文郁は熊本市出身で、西南の役語に相良村に映った。勝清は済々黌学校に進学している（卒業はしていない）が、同校は国権党の牙城であった。

た。党派的の争いは、永遠につづくわけでなく、いずれは解消する運命にあるとしても、渦中の当事者にはそれを予測できない。未来はすべて不確定に映る。争いがあるとき、相互に協力しあうという風土は形成ず、資本の蓄積・集約もすすまない。

そうした熊本県内の「世論」状況にもかかわらず、坂本工場は設立されていった。そこで、どのような要因が工場建設を促進する要素として作用したかが問題になる。『会社史』は、三要因をあげている。第一に日清戦争の勃発である。日清戦争にかぎらず、戦争は構成員の自国意識の強調（ナショナリズム化）と経済の短期的好況（戦争特需）を伴う。構成員（国民）の意識が「郷土愛（愛国心）」に集約されていなければ指導部は戦争にむかえない。「戦争やむなし」の意識だけでなく、戦争反対の世論（厭戦的雰囲気）も指導部の意識に反映するのであって、戦争反対者が一連のプロセスのなかで淘汰されなければ戦争を継続できない。日清戦争も同様である。反対派はいた。しかし開戦状態になると反対派は戦争協力に一気に方向転換した。坂本工場建設に即していえば、戦争という例外的状況のもとで各党派は双方の差を縮小し、同一の精神の下に向かった。両者のナショナリズムの進行とともに対立軸を不透明にさせた。

同時に、戦争は戦争特需によって生産活動を一時的に活発化させた。少なくとも、そのような外観をつくりだした。戦争の長期化は国民経済を必然的に悪化させるが、日清戦争は短期で終了し、戦時経済のマイナス面は、それまで表面化しなかった。むしろ清国（中国）からの賠償金の獲得は西欧列強的力を、日本は有するという「錯覚」をもたらした。もちろん、戦争関連の特需の終了によって景気は一気に下降する（軍事関連需要が縮小する一方、戦時費用の償却が進むのでそれは当然の結論で、そのことは坂本工場の歴史にも影を落とすことになる）が、経営者はそれを心配しつつも、当面の需要にこたえるのに力を集中し、「経済成長」をつねに夢みる。


閉鎖直前の坂本工場

『会社史』」は、さらに、次のように説明する（1～2頁）。

「明治二十七八年戦役は、実に我が国威を内外に宣揚する天与の好機で、中央に於ては早くもこの大勝を記念するため、日清製粉、日清紡績、日清生命等幾多の有力企業が設立された。この機運に促されて、熊本県でも、県下の一流人士間に、この際従来の党争観念を一掃して、純真な愛国心の発露から、熊本県人中心の事業を起こしたらならばといふ話が持ち上つた。偶々九州銀行頭取上羽勝衛、商業会議所頭取岡崎唯雄の両氏が中心になり、これに彼の有名な肥後勤王の志士宮部鼎蔵の同志の一人として、天王山に錦旗を擁し挺身国事に奔走した藤村紫朗と、明治維新前後に一大活躍をした横井小楠の門下生で、顕才に富んだ安馬保和の両氏が加はつて、県下にしかるべき地を卜し一大製紙会社を建設せんとする案が立てられ、明治二十八年十二月に肥後製紙株式会社が出来上がった。」

ここで注目したいのは「日清製粉、日清紡績、日清生命等幾多の有力企業が設立された」との指摘である。国内有力企業の創設は先行（成功）事例として県内有力者に受け止められて、熊本県内世論を工場建設に向かわせる方向に動機づけた。「中央に負けるな、先進県になる」という郷土意識を強める傾向が強まった。同一の傾向は熊本県だけでなく、日本全体で進み、同時期は、日本近代史上の「産業革命」期になる。

《『会社史』》

『会社史』は、成田潔英『東肥製紙会社小史』（昭和21年5月）に、佐藤秀太郎編『東肥製紙会社小史補遺』を加えた増補版である。成田は熊本市生まれ。王子製紙の社員を経て、同社記念館長、紙の博物館館長などを歴任。『洋紙業を築いた人々』（紙業叢書　製紙記念館、昭和27年11月3日）など多数の著作がある。煩雑になるので該当箇所をひとつひとつ明示しないが、小論は成田の著作に多くを負う。潔英は「きよふさ」と読む。1884年～1979年。

会社史は、上羽勝衛（九州銀頭取）、岡崎唯雄（商業会議所頭取）、藤村紫朗（男爵）、安馬保和（男爵）の4人の名前をあげている。この4人が熊本市役所に集まった。4人は「一流人士」のなかでも大物である。熊本近代史を検討するとき、4人の名前はかならず登場する。坂本工場建設には、この4人の大物が関わったのである。坂本工場建設に対する県内世論の期待をそれだけでうかがえる、4人は、同日以前にも、さまざまな経路を利用して連絡をとりあい、工場建設の準備をすすめたにちがいない。事前の交渉記録はのこっていない。

深水発電所（現在は日本製紙八代工場が管理）

4人の関係を概略しておこう。会社史は上羽と岡崎の両者が中心になったとする。藤村と安馬の両名が有司専制（維新政府）の官僚として国家的レベルで活動していたのに対して、上羽と岡崎の両者は熊本県内で党派争いのなかで苦労していた。党派的には、上羽は自由党で岡崎は地元商人代表（無所属）で同一でないが、国権党優勢のもとで二人は政界進出を果たせずいた。両者にとって国権党は「目の上のたんこぶ」であった。

日本製紙八代工場は坂本工場の分工場して出発した

日清戦争という事情に加えて、藤村、安馬の両者が華族に列せられるという偶然もあった。二人は男爵を授けられて郷里入りし県内世論を統一させた。上羽と岡崎にとって、それは追い風であった。上羽と岡崎の両者が中心になりながらも、社長に就いたのは藤村であった。それは県内政治の力学の反映であろう。実務能力だけでは社会組織の頂上には就けない。

以上を簡単に整理すれば、日清戦争、成功事例の存在、そして藤村たちの凱旋帰熊、この三者が坂本工場設立の直接的要因であった。

【うえむら・ゆういち／編集主幹】

《八代市と人吉市》

熊本市は明治22年（1889年）4月1日に発足したが、八代と人吉はそれから50年以上経過したのち市制に移行した。八代市は昭和15年（1940年）9月1日、人吉市は昭和17年（1942年）2月1日。

《「戦時経済」》

戦争は、国民を兵役につかせることによって労働力を減らし、戦争遂行目的に合わせて投資を促すので長期的には経済活動を必ずマイナスにする。軍事物資生産を重視すれば生活物資の生産は低下させるし、戦費調達は国の財政を悪化させる。国内資金で賄えないときには海外資金を調達し、それを軍事産業にまわすことになるが、それによって国際収支は悪化し、民間の貨幣流通も減少する。戦争は生産をともなわない消費（浪費）で、国・国民を疲弊させる。しかし、一時的には、兵器関連産業、兵站にかかわる産業で特需を発生させ、そのかぎりで、「好況」的外観をつくりだす。戦争が長期化すれば、その外観も失われる。敗戦国だけでなく戦勝国も同様である。戦勝国は戦争で失われた経済的損害を回復するため敗戦国に損害賠償を求めることが通例であったが、それは敗戦国の経済をさらに悪化させ国力を一気に低下させ戦勝国に対する反発発生の温床をつくりだす。第一次世界大戦のドイツがその例である。日本は、太平洋戦争での敗戦後に賠償金を求められなかった。朝鮮戦争特需という経済活動を好転させる状況もあった。それでも日本が戦前の生産力水準に達するまで10年の期間を要した。昭和31年（1956年）に『経済白書』は「もはや戦後ではない」と書いた所以である。

緊急ルポ

肥薩線の事故

11月3日、道の駅坂本（八代市坂本町）にいた。突然、消防車、救急車のサイレンが響いた。火事だろうか、と思った。パトカーも通った。球磨川の上流に向かっていった。

消防車、救急車、パトカーの数が増えていった。友人・知人から列車事故が発生したとの連絡が入った。現場に向かった。荒瀬ダム上流800メートル付近にあるJR肥薩線の踏切だ（佐瀬野第一踏切）。

早い時点で規制がはられていた。「通行止めです」と二ヶ所で指摘された。事故現場を知っていたので、指摘を無視してそのまま事故現場に向かった。

現場に着き、事故を目にした。急ぎ写真を撮った。警官が走りよってきて、「一般人もいるので、写真は撮るな」と強い口調で告げた。「現場検証も済んでない」ともいった。警官は1人であった。マスコミは1社もきてなかった。ピリピリとした緊張感が走っていた。地域住民が遠巻きに事故現場を不安げに眺めていた。

事故車両には見覚えがあった。「ダム関係の車両か」と質問すると警官はうなずき、工事関係者が直ぐに来ると言った。本当に直ぐにきた。会社名を質問したが答えず、規制線を越えて事故現場に向かった。上空ではマスコミのヘリが旋回しはじめていた。

緊急の用件が別にあったので現場を離れた。そして対岸（球磨川左岸）から事故現場を再度みた。100メール以上、離れているので鮮明な写真は撮れなかった。多くの人が事故に気づき事故現場を眺めていた。「5人軽傷らしい」との声を耳にした。小学2年生ぐらいの少年が「SLは来ないのか」と父親にくりかえし質問していた。SLを観るために遠方からきたようだった。「今日は、来ないよ」と話したが、少年は納得しなかった。人吉市内のタクシーが停車した。「かわせみ・やませみ」の運転士を八代まで送ったという。運転士は車内でなにも話さなかったという。そのとき知人から、「友人が事故に遭った。急ブレーキの後に大きな音と衝撃があった。無事だ」との連絡があった。

佐瀬野第一踏切の事故現場（11月3日）

事故現場の通常の様子

球磨川左岸から見た事故現場

事故原因について三つのウワサが流れた。①衝突車両は車体が長いので踏切を渡るのに手間取り事故につながった、②クレーンが遮断棹に引っかり踏切を渡れなかった、③事故発生10分前から現場に停車していた、積載超過で動けなかった、というものであった。

7人の警官に質問したが、どの警官も口を濁した。翌日（11月4日）の新聞は「八代署によるとショベルーカーを積んで渡ろうとしたトラックに降りてきた遮断棹に引っ掛ったため、近くの誘導員が遮断棹を外そうとしたほか、非常ボタンを押して列車に知らせようとしたが、間に合わなかったらしい」とする（熊日新聞23面）。「らしい」であるから、以上はすべて推測である。

地元のタクシーの運転士からはケガ人をタクシーで搬送したと聞いた。

14時頃、検査車両が瀬戸石駅に停車していることを知った。検査車両の乗務員は「明日までには復旧させる」と発言したらしい。不思議ではないと思った。10月6日の瀬戸石地区の土砂崩れのときもJR九州は短時間で「復旧」させていた。

17時頃、大型クレーンが設置された。復旧作業がはじまった。23時すぎも復旧作業はつづけられていた。検査車両がいつ頃通過したかは知らない。2度、走ったらしい。翌日、肥薩線（川線）は始発から動いた。

新聞報道（11月4日）によれば、列車の乗員・乗客71人のうち、男児（8）を含む乗客11人が頭や胸を打つなどの軽傷を負い、自動車運転処罰法違反（過失致傷）の疑いもあるとみて八代署は自動車の運転手から事情を聞いているとのこと。（春秋）

瀬戸石ダム

国交省、異例の判定
8回連続の「A判定」

国土交通省九州地方整備局は、ダム操作規定第4条に基づき、瀬戸石ダムに対する定期検査を5月末実施し、その結果を、先月末（10月30日）付で、「総合判定A」とした。

「総合判定A」とはなにか。同規定は、「ダムおよび当該河川の**安全管理上重要な問題があり、早急な対応を必要とする**」とする。国交省は、平成14年（2002年）から定期検査を2年ごとに実施し、瀬戸石同ダムに対してはこれまで、すべて「総合判定A」と判断してきた。今回を加えると、連続8回の「A評価」になる。「早急な対応を必要とする」との判断に注目するとき、連続8回の「A評価」は異常である。国交省によれば、全国的にも他に例がない。

2年に1度の検査であるから16年間、「安全管理上重要な問題」が存在する状態が継続していることになる。16年は長い。

それにしても、16年前から状況の改善を求められていたにもかかわらず、瀬戸石ダムを管理する電源開発株式会社は、いったい、どういうスタンスでいるのだろうか。国交省も「総合判定A」としながら、同社に対して、どのような姿勢でのぞんできたか。

国交省は、「ダム湖の土砂堆積により洪水被害が発生する恐れがある」点に注目しているが、同社はどうか。洪水被害と人命にかかわる重要問題である。

ダムは、水の流れを止めるだけではなく、下流への土砂の供給を止め、ダム湖内にそれを堆積させて河床を高くする。河床が高くなれば、水害被害は発生しやすくなる。堆積土砂はダムの宿命であって、その除去はつねに課題になる。

国交省は、同社に対し12月20日までに、改善策を提出するように求めた。同社の回答に注目したい。（春秋）

柳人があじわう漱石俳句

―⑳―

いわさき楊子

やかましき姑健なり年の暮

（漱石32歳）

姑からみれば漱石（そのころは金之助）も普通の娘婿にちがいない。東京から遠く離れた熊本にいる娘が気になっていただろう。「やかましき」とはいえ「健なり」という措辞におかしみと、安心がみえる。

妾と郎別離を語る柳哉

（漱石32歳）

これはまったく想像の句だろう。柳の下で別れ話をした。現代なら目抜き通りから入った古い喫茶店というところか。

俗俳や床屋の卓に奇なる梅

（漱石32歳）

異様にねじまげられた悪趣味の盆栽の梅の木に目がとまった。自ら「俗俳や」と自嘲している。このような句を詠んだひょうきんな若い漱石さんが確かにいた。

女郎花馬糞について上りけり

（漱石32歳）

阿蘇谷への入り口にある「戸下温泉〔八句〕」のなかの一句。女郎花（おみなえし）も竜胆（りんどう）も阿蘇の野の花は美しい。馬糞によって種が運ばれるという節理も自然なことだ。すらりと馬糞を詠んだところが漱石の個性。

容赦なく瓢（ひょうたん）を叩く糸瓜（へちま）かな

（漱石32歳）

「風ふけば糸瓜をなぐるふくべ哉　漱石」という類句もある。漱石はひょうきんなもののたとえとして、糸瓜と瓢（ふくべ）（ひょうたん）をよく使っている。ぶら下がるものが互いに叩きあうさまは愉快だ。川柳人は人に転じて読むくせがありますよ。

ライバルに含み笑いで誉められる
羽衣が掛けられるよう曲げる松

【いわさき楊子（ようこ）／川柳誌「裸木（らぎ）」編集人、熊本市】

記憶の落ち穂

その⑲

絵と文／坂本福治

『若松兎三郎の生涯』

湯島聖堂で過ごした二十代、私は「世界友情の集い」に参加した。同僚に習った「黒田節」を舞台で披露したら好評だった。交流会の時、そばに居合わせた青年が韓国人だったので、私は平壌生まれと名乗り、名刺を交わした。それから互いに老年になるまで、年賀状だけの付き合いだった。彼から本が届いたことから、新宿の朝鮮料理店で会った。何と、彼は大東文化大学の教授になっていたのだ。日本名、永野慎一郎。日本と韓国の歴史を、公平な目で観察し、愛情をこめて調べていた。私にはそう思える。

この度、大分県玖珠町の出身で、外交官として朝鮮半島で偉大な活躍をしながら、忘れ去られようとしている若松兎三郎（とさぶろう）に光を当て、徹底した調査による著書を準備していた。そこで表紙に、平壌生まれの私の絵を望み、若松の仕事に関係の深い綿の絵を描かせてもらった。光栄の至り。若松が接した人物は、勝海舟、福澤諭吉、尾崎紅葉、徳富蘇峰、小村寿太郎ほか、まばゆいばかり。

（二〇一七年一〇月二五日初版発行、明石書店三、〇〇〇円＋税）

【さかもと・ふくじ／画家、人吉市】

河口から上流まで、その駅を訪ねる

球磨川の駅・ものがたり

連載その⑳　くま川鉄道・木上駅

熊本産業遺産研究会　松本晋一

一武駅を出た線路は球磨川に沿って大きな左カーブを描きながら東上する。これも球磨川の流れの外形に沿った形なのである。その分、この路線が川に近いことを意味している。

木上駅の北西500m、球磨川左岸の河川敷にはラジコン飛行機専用の飛行場があり、気候の良い風の少ない週末には愛好家が集まる。平成22年11月13日には、人吉出身の日野熊蔵・徳川好敏日本初飛行航空100周年（1910年12月）にちなんだラジコン飛行大会（全九州RCスケール機）が、木上のこの河川敷で行われた。中でも島根県出雲出身の長濱洋一郎さんのゼロ戦52型（4分の1スケール）は全長2・25m、翼幅2・75mの大型機で、空に上がれば実機と見分けのつかない迫力があった。

このラジコンクラブの始まりは、高原（たかんばる）旧飛行場でラジコンを飛ばしていたマニア達が、約35年前にこの場所に場外離着陸場を造成して始めたとのこと。現在、人吉球磨フライヤーズクラブが管理しており、併せてウルトラ・ライトプレーンの離着陸場でもある。毎月1回の定例会、全九州スケール機大会が年1回開催されており、熊本・北九州・山口の会員らも利用しているとのこと。

線路は一武駅から約800m地点で水無川橋梁を渡る。この橋梁は産業遺産的に

11月の定例会風景

は大正13年の建設当初、上路鈑桁2連であったものが、昭和40年代初めの河川改修により湯前線では初の下路鈑桁2連となっている。長さも9・5mから55mと延長、設置位置も僅かに下流に変更された。隣接して味岡建設の採石場があり、そこは橋の西端に位置し、ここからは橋全景を見ることが出来る。

水無川橋梁（福）

この路線の南側には平野・平良（たいら）・黒田など、付近の地名に稲作の豊饒さを感じさせる地名が見られる。美味しい球磨焼酎の元は、ここで取れるお米がその由縁でもあろう。またこの地点も球磨盆地の中央に位置することから、ここからは南北の九州脊梁の稜線眺望にも素敵な所である。

ホームのツクシイバラと看板（福）

木上（きのえ）駅

木上駅は川村駅と同様、昭和28年7月15日開業の請願駅。昔、御神体を木の枝にかける葛掛（くずかけ）神社の風習が駅名。現在64年目を迎える。平成20年5月には付近の球磨川河畔に自生するツクシイバラ（前原勘次郎が1917年発見の野イバラ）にちなみ、「ツクシイバラの里・木

ツクシイバラ祭り（平24.6. 福）

上駅」とPR改名。その季節はホームに造られた花壇のイバラも開花し、河原ではツクシイバラ祭りが開催される。

ここも川村駅と同じく、60年以上を経た待合所とホームが登録有形文化財。このホームは昭和42年に一武側を改造、手摺付きの階段が設けられ、一武寄りのホーム脇に

有形文化財の待合所

木上駅ホームと階段造成記録（岡留幸福駅方面）

1967年のその記録が残されている。古老の話によれば、この駅の造成当時、人吉農芸学院の院生らが、トロッコを押してホーム造りを手伝っていたとのこと。また大雨時には一度、近くの冷水川（ひやみずがわ）が増水、駅のホームまで水が押し寄せたと言う。

駅所在地は錦町大字木上3003、写真のように1面1線のシンプルなプラットホーム駅である。起点の

乗合タクシー乗降場

人吉温泉駅からは11・3㎞、一武駅から2・1㎞、次のおかどめ幸福駅までは1・7㎞の位置に在る。乗客は朝夕の通学生、土日の帰省客が僅かに見られる程度。駅そばの平野第二踏切横には通学用の屋根付き自転車置き場があり、そこは錦町乗合タクシーくらんど号の乗降場を兼ね、曜日別の朝夕、旧3町村とこの駅を結んでいる。線路脇の道路は線路と並行する狭い道だが、車が多く人吉・西村・免田

を結ぶ裏の幹線道路でもある。

左は僅かに34年前の国鉄時代の写真であるが、木上駅を出る気動車の他には、周辺には何もなく、のどかな田園風景であったろうと見て取れる。同じく駅ホームの木造駅名標が44年前当時の風情を残している。

駅の南西、400mには平野神社がある。本殿は切妻造、屋根は

木上駅を出る気動車（昭 58.1. 福）

国鉄時代の木上駅（昭 48.1. 福）

銅板葺きで、1540年（天文9）に再興されたとされる。周辺の田園にマッチした佇まいがあり、鳥居正面の田圃には稲穂がたわわに実っていた。他にも駅近くに才園古墳、きのえ大橋（昭和63年10月架橋）傍には〝天子の水〟という湧水がある。天気の良い週末、大橋下の自転車遊歩道には、多くのサイクリストたちが河畔を駆け抜ける。

平野神社正面

神社前の稲田風景

〈参考資料〉
・「線路は続くよどこまでも」昭和62年3月　熊本鉄道管理局
・「小さな航空ショー展開」平成22年11月10日　人吉新聞
・伊藤幸司「人吉盆地」あるくみるきく　109号　1976・3　近畿日本ツーリスト
・「わたしたちの錦町3年・4年」平成11年3月　錦町教育委員会
・「錦町の文化財」平成28年3月　錦町教育委員会
・球磨の駅　昭和56年11月23日　人吉新聞
・新球磨学　流域紀行球磨川　昭和63年2月　熊本日日新聞社
・前掲「熊本の駅と港」熊本の風土とこころ③　昭和58年
・熊本日日新聞社編「各駅停車、全国歴史散歩　熊本県」一武木上　河出書房昭和58年
・くま川鉄道開通20周年「盆地を走る」駅シリーズ　肥後木上駅　平成21年5月13日　人吉新聞
・ウィキペディア「木上駅」
○資料提供：（福）は福井弘氏
○聞書き：山室勝介氏

くまがわの神さん仏さん⑮

球磨村お堂巡りその④

宮原信晃

遠原地蔵堂（球磨村遠原）

―遠原地蔵堂―

人吉球磨の1番大きな秋の大祭は国宝青井阿蘇神社の「おくんち祭り」。

この祭りが終わった翌朝から朝霧の街となるはずの気候なのだが、暖かいのだ。台風が2つも日曜日には九州をかすめて通過しても、まだまだ、例年のような冷え込みが訪れない。

山の秋の楽しみは紅葉なので、高度のある場所に登れば人様より一足早い紅葉を見られるかもと、球磨村でも1番高い集落と思われる遠原（とうばる）のお堂へ行く計画をたてた。

いつものお堂巡りは一人で行って、お堂を守っておられる方にお話を伺うのだが、遠原に二度行ったことはあったが、人に会うことすら出来なかった。

それならば、誰かを誘って私が取材する姿を写真に撮ってもらおうと、月刊くまがわの編集部（ま）さんに電話すると、今日のお昼休みの時間帯なら行けると返事があり、さっそく球磨村の渡にあるコンビニから左折して松谷へ二人で向かった。渡から松谷まで20分。そこからまだまだ上へ登っていく。最近注目されている山桜の巨木の横を通って普通車の幅が一杯かと思われる山道や左の崖に落ちたら絶対に見つからないねえと、ヒヤヒヤの運転。途中の俣口（またぐち）の小学校跡や、俣口大師堂の姿を確認しながら、一本道を登る。何とか遠原集落へ到着した。

「起点」と書かれた看板のある道路の前に車を駐車して「遠原地蔵堂」へ下りる。道の下にあるのだ。

色白で美しい遠原地蔵堂のお地蔵さん

道から20m程あぜ道を下りて地蔵堂の前に立つ。ポケットの中の小さな数珠を手に持ちお堂の中に入る。

「なまんだぶ」の念仏を口にしてご本尊の入った扉を開く。

何と色白で何と口の紅が美しいのか。

まるで名家へ嫁ぐ花嫁の姿か。

お地蔵さんの横に箱定規を立ててお地蔵さんの坐位の寸法を測る。70センチの箱定規より5センチほど低い。

お顔をじっくり、目や顔、ほほの輪郭、耳の長さをじっくり、左手の宝珠や指の爪をじっくり。刻まれた衣の様子や手彫りの証拠を目をこらして見る。

あちらを見ても、こちらを見ても江戸期のお地蔵さんに見える。

しかし、石材が明らかに新しいのだ。

もし、江戸期ではなく近代の作品とすれば誰が？　手の指の爪と、足の指先の作りが気になる。

どこかで見た事のある石仏だ。

次の「遠原阿弥陀堂」へ向かう。

車で5分走って、道に駐車して小道を20分は登ったろう。中に入って阿弥陀様に御対面した。平成元年に全戸数の24戸の皆さんが寄付をして阿弥陀様を修復したと板に書かれていた。

阿弥陀如来の左手は親指とひとさし指でワッカを作っておられるのだが、右手が不思議。阿弥陀様の右手に左手が装着してあるように見えた。

不思議な仏様である。

この仏様を修復する前と後と、ちゃんと遠原集落の方々はチェックしたのだろうかと、心配にもなった。

リンが置いてあったので、リンを鳴らしてみた。「チ～～ン」。

すると、外で鹿の鳴き声がするのである。もの悲しい鹿の鳴き声だ。さすがに、遠原集落である。鹿も阿弥陀様にお参りするのかと、二人で感心しながら帰路についた。

遠原阿弥陀堂に置いてあった年代物のリン

さて、帰ってからである。

あの地蔵堂の地蔵さんは江戸の頃か？　いや近年の作ならば、誰の作か？

あの、手足の指が仏様の体と比べると変に大きい。どこかで見た事がある仏様に思えてきた。ひょっとすると昔、渡におられた石屋の吉田寿（ひさし）さんか？

一勝寺の参道にある石仏や渡駅から水篠へ向かって300m程入った所にある「馬頭観音像」などがそうだ。

吉田石材店や、遠原集落の方に電話で聞いてもわからないとおっしゃる。

これは、もう一度、吉田さんが作った石仏を見て回りその足で遠原地蔵堂のお地蔵さんを見に行こうと（ま）さんに連絡するつもりであるが、行くかなあ。

【みやはら・のぶあき／FBお地蔵さん調査隊代表・人吉おおくま座の会事務局】

漢和字典は面白い

3

鶴上寛治

赳

音読みはキュウ。ある軍歌の歌詞に「キュウキュウたるブーブーはコッカのカンジョウ」という部分があり、漢字で《赳々たる武夫は国家の干城》と書いてある。軍歌には、こういった難しい漢語を連ねたものが結構多い。新兵たちに自分の無学を自覚させ、教養深そうな上官や古年兵には絶対かなわない、絶対服従しかない、と断念させる手だてだったのかもしれない。

意味は〈勇敢な軍人は、国家の護り手〉ぐらいのところ。「詩経」に〈赳々武夫、公侯干城〉と使われているという。それからの引用だろうが、「詩経」などを読んでいる新兵がいただろうか。「檻（オリ）にギュウギュウつめこまれ、ブーブーないている豚たちは国家財政（勘定）にとって重要」という意味？と誤解されそうな歌詞。

「赳」は《強いさま。たけだけしいさま。勇ましいさま》。叫・糾・虬（みずち）などの字に共通するのは〈糸がもつれる・もつれて大声をあげる・まつわる蛇〉の意味だと。何だか苦し紛れに叫んでいるみたいだけれど？　この字を親からもらい〈たけし〉と読ませている方もおられるのでケチは付けない。

新

字形は〈斤＋木＋辛〉で、実は「薪」の原字。切り口が鮮やかなところから《あたらしい・あらたに・あたらしくする》の意になった。他の漢字みたいにやたらに意味が拡大していないのが嬉しい。おもしろいのは宮崎県新田原という地名だ。ニュータバルと読むが「新」の字をなんと〝ニュー（new）〟と英語読みしているではないか。まあ、偶然の一致だろうが。いや、この字には新妻（にいづま）・新田（にった）・新納（にいろ）のように〈にい〉という訓読みもあるのだ。

日本語の問題だが、形容詞「あたらし」は昔は「あらたし」だった。《あたらし》というのは新しい使い方なのだ。なぜ《たきぎ》を「薪」と書くのか？――元来「新」が《たきぎ》の意味の漢字だった。ところがこの字が《あたらしい》の意を持つようになったので、上に草冠をつけた「薪」という字を作ったのだと。母屋を取られたわけだ。

【つるかみ・かんじ／人吉市】

136年前、人吉球磨で昆虫採集した英国人
ジョージ・ルイスの足跡を検証する（下）

環境省希少野生動植物種保存推進員　宮川　続

もうひとつヒントがあった。標高である。Ogumaの標高は2000フィートである。メートルに換算すると609・6mになる。JR矢岳駅が536m、駅を背にして右手の小高い山が609mであるから標高としても合っている。また、当時薩摩への道として「薩摩往還」があった。「薩摩往還」は大畑麓町から小川内川（こごうちがわ）沿いに矢岳町（現在の可徳牧場付近）まで登り矢岳高原を越えて吉田温泉に至る。江戸時代末期の大火で、相良家が島津家から借金をし、その返済のため明治の中頃まで利用していたという。現在は落石や草に覆われ歩いて行くのもおぼつかないが当時は立派な街道だった。

2017年9月25日に矢岳地区の写真を撮りに行った。「おこま」の地名の所在を確認したいと思い、旧知の高橋エミさん（89）に声を掛け、「おこま」はどこかと聞きながら、明治時代に外国人が来た話を聞いたことはないか尋ねたところ、「外人がうちに泊まって、風呂はゴエモンだったのでたらいで水浴びをした」という話を姑から聞いたという。娘さんのむつ子さんもひいばあちゃんの頃の話としてばあちゃんから聞いたという。この時代に外国人が人吉球磨に来るのはとても珍しいことであるからジョージ・ルイスであろうことは推測できる。また、元国鉄機関士の立山勝徳氏の話によれば、矢岳は国鉄の矢岳隧道が難工事の末開通したことからすぐ近くの駅を「矢岳駅」とし、その集落名も「矢岳」としたという。「おこま」または「おごま」の記録がないか調べたところ、昭和16年発行の「球磨郡誌」の中の藍田村の項に「大川間川区」の記載がある。肥薩線が全線開通したのは明治42年であることから、ジョージ・ルイスが訪れた集落は「大川間（おごま又はおこま）」であったことが裏付けられた。

9月27日に矢岳町のデイサロンが開かれ、矢岳地区の多くの高齢者が集まることを町内会長の大杉寅喜氏から聞き、参加の許可を頂いた。これまで調べたことを話し、

謎の地名

もう一つは「Oguma」である。

まず、Ogumaは小隈または小熊と表記されている。草間敬一氏も江崎氏も「小隈」と推測されている。しかし、私の知る限り人吉周辺にそのような地名はない。音が似ているので大畑（おこば）ではなかろうかと推測した。前田一洋氏に話してみると大畑を「おおごま」又は「おこま」といっていた記憶があるという。そこで、大畑麓町の桑原史生氏に尋ねてみたところ「おこばはむかしからおこばバイ」という。さらに、「おこまは矢岳の事たい」という。その名残が矢岳を流れる川の名で「大川間川」と書き「おこまがわ」という。なるほど。

④矢岳駅からの眺望（中央が高橋家）

⑤永葉集落から高塚山を望む

皆さんの話を聞くと矢岳はやはり昔は「おこま」といい、大杉サチ子さんはお母さんからそんな話を聞いたという。外国人が来た話は高橋さん以外からは聞けなかったが、大戦後、闇で焼酎を造って売ったことなど面白い話を聞いたがここでは省略する。

このような事を考え合わせるとOgumaは矢岳のことに違いない。〝Oguma→おおごま→おこま〟と飛躍しているようであるが外国人が球磨弁を聞いて英語表記しているのであるから頭を柔らかく使わないと理解できない。しかも漢字表記では「音」は伝わらない。大川間川と書いて「おこまがわ」と読めるであろうか。ましてや「おこま」が「矢岳」と変わっていれば、桑原氏のように地元の詳しい人に尋ねるよりほかなくなってくる。残念ながら桑原氏は本年3月他界された。

ここから、私の推測である。5月3日に人吉に着いたジョージ・ルイス一行はこれからの予定を考えた。市房山にいくことはすでに計画にあったから、盆地の北にそびえる脊梁から市房山にかけての山々はその行程中に調査できる。また、一勝地では球磨川の南でかなりの成果を上げている。そこで、南側の山並みを調査すべく計画を立てた。人吉町から南を見れば大畑周辺の山々が見える。その西側には藍田村から球磨川のすぐ近くまで緑の山々が球磨川沿岸まで迫っている。まずこの近くの山を調べることにしたに違いない。

5月4日、宿泊している人吉町（たぶん「鍋屋旅館」と考えるが、昭和41年の水害で宿帳など古い資料がほとんど流されているため確認できなかった）から馬を利用して、大橋を渡り灰久保・矢黒を経て黒坂を越え永野川沿いに至る。黒坂を越えたと考える根拠は、当時は人吉橋も西瀬橋もなかったからである。馬を使った行程で、わざわざ下流の薩摩瀬辺りまで行って渡し船を使うとは考えにくい。また、黒坂の切り通しを越えたからこそ永野に至ったと考えるのが自然である。もし、渡しのある薩摩瀬から球磨川を渡って川を遡ると「なっかやま」ではなく鹿目に至ったであろう。

永野川沿いをさかのぼりRakuwayama（なっかやま・永葉集落）に至る。さらに高塚山周辺を調査し、高塚山の頂上まで登ったルイス一行は、頂上からさらに南にそびえる山々が宿泊先から南に見えたOguma（おこま）の山々であることを聞き、採集欲をかき立てられ、この後、「おこま」にいくことを決めたのであろう。

翌日（5月5日）、馬を使って「薩摩往還」を通り、登りついたOguma（おこま）の集落は小さな盆地で川の周囲は湿地となっており多くの昆虫を採集できたに違いない。しかも初めて訪れた小さな集落の高橋家に宿を請い宿泊した。翌日（5月6日）は背後の峠まで登り、カミキリムシやオサムシなど多くの昆虫を採集し人吉に帰ったと考えられる。矢岳町の大杉氏によれば背後の山を越えて大塚に至る道があり、その峠はルイスが記録している2000フィートに符合している。とすればこの峠を越え、大塚を経て人吉に帰ったのかもしれないが、何も記述がないため検証できない。この地がよほど気に入ったのか市房登山後もまた「おこま」を訪れている。

5月9日から6日間を掛け市房山まで調査している。途中

⑥高塚山頂から矢岳方面を望む

⑦高塚山山頂付近からの市房山遠望

Kurohejiji（黒肥地）を通り、10日に湯山とあることから9日は黒肥地に宿泊したと考えられる。そして10日に湯山に到着し4泊しての市房調査であった。

途中の黒肥地の標高が気になった。Kurohejiji（黒肥地・多良木町）１３００となっている。現在の多良木町黒肥地の中心地付近の標高が１６５ｍ（５３０フィート）程であるから数値が大きすぎる。では、黒肥地のどこを通ったのであろうか。

黒肥地在住の郷土史家住吉献太郎氏は、当時人吉から湯山を通り椎葉方面へ行く「北目街道」があり、この北目街道を通ったのではないかという。しかし、北目街道でも標高が１３００フィート（約４００ｍ）では高すぎるのである。この標高では黒肥地は宮ヶ野や柳野辺り上流部の山となる。昆虫採集を目的としているのであるから湯山への最短距離の球磨川沿岸から上流部へいくのでは成果が上がらない。また、黒肥地に宿泊している事にも注目したい。時間をかけていることから北目街道を東へ進みながら途中の平山・松ヶ野・宮ヶ野などに入り込みながら一日をかけて黒肥地まで行ったのであろう。そうすると宮ヶ野集落の上流部まで遡ると標高があう。ここもまたKurohejiji である。

人吉を出発し、石清水を経て川村に入るとすぐ川辺川の豊かで清らかな流れに出る。ここを渡り、高原（たかんばる）から人吉盆地の北の山裾を「北目街道」に沿って東進しながら、いくつかの谷筋を遡上し採集を試みた。こう考えるのが妥当であろう。

では、黒肥地のどこに泊ったのか。少なくとも4、5人ほどの一行で馬も数頭いる。この数が宿泊できるところはそう多くはない。住吉氏は、黒肥地に宿泊するとすればお寺か庄屋のような大きな家ではなかろうかという。とすれば青蓮寺、または旧家で宮元家ではなかろうかと考えられるが記録は残っていない。

もう一つIchibosayama（市房山）の表記も興味深い。明治初めの頃は「いちふさやま」ではなく「いちぶさやま」と呼んでいた事がわかるのである。この市房山での採集はコブハナダカカメムシなど成果が多かったのであろう。その後、採集人を向かわせ7日間かけて再調査をさせている。

おわりに

田原鳴雄氏の話を聞いてコブハナダカカメムシの原産地2頭目を採集したのが椎葉房夫さんであったことは前号に書いた。田原鳴雄氏からこの話を聞いてはいたが、うかつなことにその情報をどのようにして知ったのかは聞いていなかった。しかし、田原鳴雄氏が水上村誌の中で詳しく述べていることで私の謎も解けた。しかし、その元になった「朝日新聞の記事」は、調べたが発見することは出来なかった。

明治14年に遙々と人吉球磨へ昆虫採集に来たジョージ・ルイスの昆虫に対する情熱はすごい。人吉に来る前には北海道・東北と回っている。たいへんな探検旅行であったに違いない。いろいろ考察しながらこの探検家の情熱に改めて感動した。最後にこの検証に協力いただいた多くの皆様に感謝する。

【参考文献】
・草間慶一（１９７１年）「ジョージ・ルイスの足跡について」「月刊虫」１９７１年11月号・12月号
・江崎悌三（１９５３年）「外国人による九州の昆虫採集」「新昆蟲」
・久末真一（２０１４年）「イトウ」と「ルイス」～イザベラ・バードの旅の世界に寄せて～「北海道大学総合博物館ボランティア　ニュース」第32号
・田原鳴雄（２００２年引用）「水上村誌　自然編」
・角川書店「日本地名大辞典」

【検証に協力いただいた方々】
相良古文書会の皆さん・前田一洋氏・黒肥地改太郎氏・住吉献太郎氏・立山勝徳氏・桑原史生氏・犬童淳一郎氏・永山芳宏氏・田原朗敏氏・犬童ミサエ氏・高橋エミ氏・大杉寅喜氏はじめ矢岳町の方々

【みやがわ・つづき／人吉市】

上杉芳野の「あがっ段」⑱

われら自衛隊家族会

結婚してすぐに、主人の実家、つまり今住んでいる家が火事になった。

北熊本陸上自衛隊に勤務していた主人から、パート中の私に連絡があり、急いで二人で田舎に帰った。火事で焼けた跡の片付けを、私たち二人が帰り着く前に、もう主人の職場の仲間が駆けつけて下さっていた。その時ほど自衛隊の団結力、温かい心に感謝したことはない。

それから、北海道の北見と網走との間の紋別郡遠軽町に5年間勤務した。北の寒さは見た目ばかりで、遠くから来た私たちを訛りのある北海道弁で温かく迎え入れ、地域の人達とも家族のようなお付きあいをして頂いた。

その北海道から長男と長女の望を連れ、横須賀の少年工科学校へ転勤した。

そこで主人は剣道の教官として勤務することとなり、次女の夢都美が生まれた。

次に、私たちのふる里である地元人吉にある自衛隊募集事務所の広報官として勤務。そして主人の剣道の指導は国体の強化のために忙しくなり、宮崎県のえびの、熊本の健軍と、両方に指導に行っていた。その慌ただしいころにようやく退職を迎えたのだった。

壮行会での演台の花作り（家族会女性部）

これまで、私たちが全国のあちこちへ転勤を続けている時に、実は実家の父が自衛隊父兄会の役員をしながら私たちを支えてくれていた。

チャリティーショーでの家族会の寸劇

現在、私たちの長男が航空自衛官として勤務している。今度は、私たちが支える役目が来た。

今では私が、自衛隊募集相談員と人吉球磨の女性部長となった。しかし、役とは名ばかりで私の務めは、その場その場の雰囲気作り。そう、盛り上げ役である。どこでもどんな人でも皆がひとつになって心温かいチームワークが作れたら、それで良いのだ。これまでの「父兄会」は「家族会」と名称も変更され、今こそ、この家族会を皆さんに知って頂きたい。

8月に開催した、芳野と愉快な仲間達のチャリティーショーで「われら自衛隊家族会」が出番を務めた。

起床ラッパや行進ラッパが会場で響く中、元自衛官や女性部長さんたちに参加して頂き寸劇をした。

ラッパの音楽の中で、整列したメンバーが足を高く上げて手を大きく振って進行する。

会場の皆さんに、敬礼。

小川副会長さんが、「家族会とは、隊員が災害派遣などで家を留守にする時、家に残された奥さんや子ども達の安否を確認して隊員にその様子を伝える。そこで隊員は安心して仕事が出来るのです。子どもたちが頑張っている限り私たち家族会も頑張ろうと思います。」と大きな声で発表されました。

そこから、またまた、ラッパの音で行進です。

勿論、私が先頭で大きな足運び、大きく手を振る姿を見て、須恵文化ホールのお客様は大爆笑をしていただきました。

これからも、しっかり、幸福への道を行進して行きます。皆様へ、敬礼！

【うえすぎ・よしの／ボランティア観光バスガール、あさぎり町上】

山に行こうよ！ その❾

「人吉球磨ハイキングクラブ」通信より

山犬切（やまいんぎり）

標高 1562 m

八代市泉町

～七遍巡り

2017 年 9 月 10 日（日）

天候：晴れ

参加者：9 名

トリカブトはまだつぼみ

今日は9人、車2台で人吉土地改良区を午前6時出発。男性6人、女性3人。

予定通り7時30分、登山口到着。7時40分から登りはじめる。いきなりトンネル横の急坂から。15分ほどで杉林の急坂を登り切り、尾根につく。

ここからは南側の谷から吹き上げる涼しい風を受けながら、木漏れ日の木立の中を気持ちよく歩く。

南山犬切、9時20分。七遍巡りに、9時50分。

七遍巡りにて

ここから下った鞍部の先に、目指すトリカブトの群生地がある。去年は少し遅く花は過ぎていたが、さて今年はどうかなと、期待して遠くから目をこらして見たが花が見えない。そうです今年は早かったのです。花はまだ少なくつぼみでした。

それでもしつこく花を探して写真撮影。今回もこの群生地で引き返し、下山することにした。途中11時ごろ昼食にしました。

大小のアップダウンが六ヶ所くらいあったでしょうか、みなさん本当にお疲れ様でした。

【段村東亜】

トリカブトの花

建築みてある記⑮

荒瀬ダムボートハウスをあるく

森山　学

写真① 対岸から見るボートハウス。ダム湖時代と違い水面は低い

荒瀬ダム撤去が完工に近づくなか、地元では荒瀬ダムボートハウスの再活用策が議論されていることでしょう。現在休館中の荒瀬ダムボートハウスは、建築物としても優れた施設である。ただし建築物は使われてなんぼ。再びいきいきとした本来の姿を取り戻すことを願い、今回は荒瀬ダムボートハウスを訪ねたい。

荒瀬ダムボートハウス（八代市坂本町葉木）は球磨川右岸、ＪＲ葉木駅から目と鼻の先にある。かつてはダム湖に面していたが、川が流れを取り戻しつつある今では、青々と静かに水を湛えていたかつての風景はうかがえない（写真①）。

荒瀬ダム湖は漕艇競技の直線コースを確保できることから、ダム竣工の五年後には、第十五回熊本国体（一九六〇）の漕艇競技場として利用されている。国体直前に創部された、近隣の高校のボート部の練習場でもあった。

荒瀬ダムボートハウスの竣工は、第五四回くまもと未来国体（一九九九）に先立つ一九九五年。やはり国体競技場として利用されている。以来、ボート部などの合宿研修施設として機能してきた。

その建築物としての高評価は、くまもとアートポリス推進賞（一九九五）、木材利用大型施設コンクール熊本県賞（一九九七）、優

良木造表彰施設・木材利用推進中央協議会会長賞（一九九七）、くまもと景観賞（一九九八）の受賞のほか、JAPAN二〇〇〇シカゴ展（二〇〇〇）に招待展示されていることからもわかる。

設計者は桂英昭＋AIR。桂氏は現在、くまもとアートポリスアドバイザーを務めている。坂本町の球磨川沿いにある広域交流センター「さかもと館」も同氏の設計であり、流域では、湯前まんが美術館や球泉洞森の香房・バイオ館なども手掛けている。いずれも大型の木造建築物である。

さて現地を訪ねてみると、いかに細長い敷地に建設されていることか。前面の県道二五八号線と背後の球磨川護岸との間はわずか。まさに球磨川によりそって建つ。敷地制約から生まれたであろう細長いプロポーションの形状（写真①）は、まるで船のようであり、特にダム湖時代には湖面に浮かんで見えたものである。

船の印象を強めているのは、そのまっ白な色使いである。清潔感があり、スポーティで、客船のような白ペンキ塗装は、ボートハウスにふさわしい。

この塗装面のほとんどは木部である。桂氏は大型の木造建築物を多く設計していると前述したが、荒瀬ダムボートハウスも木造である。その木造の構造部材を、外壁などで覆い隠すことはせずにさらけ出し、その表面に塗装しているのである（写真②）。

その工法は、柱と梁で組み上げて、地震などの水平力に耐えるために、筋違いとよばれる斜めの部材を柱と柱の間に挿入するもので、これを軸組工法とよび、一般の木造住宅と同じつくり方である。

柱と柱の間には床から天井までガラスがはめこまれ、ガラスには木製の窓枠や横桟がつく。このガラスの内側に筋違いがあるが、もちろん外からでもガラス越しに見える。また一階の半分ほどはピロティになっていて、ガラスさえもなく吹き放しである（写真③）。

一階と二階の上部には、水平なひさしが周囲をめぐっている。寄棟造の屋根もあるのだが、遠くから、例えば対岸から見れば確認できるもの（写真①）、近くから見上げる限り、ひさしに隠れ、その存在には気づかない。水平なひさしに天井板はなく、根太とよばれる部材が水平に飛び出してひさしを支えているのが見える（写真②）。

このように、細長いプロポーションに水平の横桟とひさしを用いることで、水の流れのような水平性を強調している点が特徴的である。それを柱で分節し、筋違いをアクセントとしつつも、柱と筋違いを反復し続けることで、結局のところ、水平性を醸し出している。

これを船と見立てるならば、舳先は上流側である（写真④）。上流側の端部は、いよいよ幅が狭まって剣先状になり（その幅わずか一間！）、二階軒高は他より一段高く、頂部に

写真② トイレ・浴室部分には外壁がある。この雁行する姿もいい

写真③ ピロティ。柱に囲まれてベンチがある

写真④ 舳先のような端部

ガラスの箱を頂く。その箱は甲板上の船室か煙突のようである。また「進め！　上流へ！」と言わんばかりに、建物自体が前のめりに突進しているかのようでもある。

写真⑤ 白色にカラフルなカヌーが映える艇庫

建物内部は、玄関ポーチの右手が艇庫（写真⑤）、左手が研修エリアである。研修エリア一階にはトレーニングルーム、二階には和室（写真⑥）などがあり、川側の長い廊下が諸室を結ぶ（写真⑦）。屋内では、ガラスだけではなく、壁にも横桟が打ち付けられている。天井も、天井板が張られていないため根太が見えている。横桟、根太、柱、筋違い。外観と同じく水平性が強調され、長い廊下をグングン進みたくなる。色も床以外は白である。

写真⑥ 二階和室から廊下越しに見る球磨川

長い廊下からガラス越しに望む球磨川は、もちろん抜群である。ガラス戸からベランダに出て、白い手すりに手をつき眺めるのもいい（写真⑧）。ピロティのベンチに座り（写真③）、仲間とともに眺めるのもいいだろう。

写真⑦ 二階の長い廊下。横桟のあるガラス戸から球磨川が見える

すぐ近くの県道脇に、錆びた手すりで囲まれた一画がある。ダム湖時代の小さな子ども用プールの跡だとか。川面へ近づくと、ダム湖の底から復活した、ダム湖以前の石積み護岸と石段へと至る。周辺地域の暮らしの遍歴も一緒に味わってはどうだろうか。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】

写真⑧ 一階廊下から白い手すりのベランダへ

くまがわすじの考古地誌

（14）

球磨川筋の弥生時代⑭

八洲開発株式会社　木﨑文化財研究室長　木﨑康弘

（NO.175）

再び「免田式バ使うてください」

『週刊ひとよし』第七二五号の「球磨の考古地誌三七」を「免田式バ使うてください」というテーマで書いたのは、二〇一一（平成二四）年一〇月七日のことだった（木﨑二〇一二b）。それは、一九八四（昭五九）年一二月一一日、肥後考古学会と鹿児島県考古学会の連合学会での出来事を取り上げた文章だ。その会場となったのが人吉市のカルチャーパレス研修ホール。そこに、少し甲高い、「皆さん、免田式という名前バ使うてください」の声が響いたのだ。

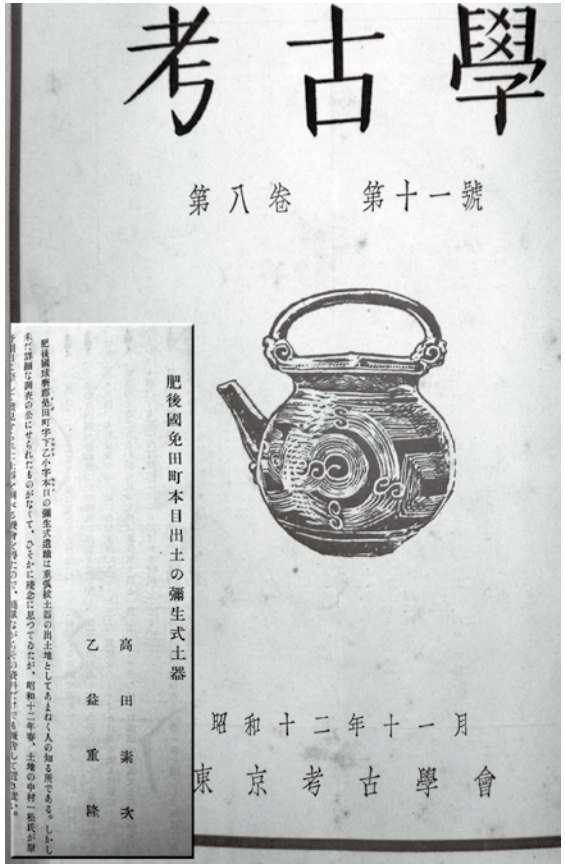
「様式名としては成り立たない」

「重弧文長頸壺だ」

連合学会の会場は、そんな発言でいっぱいになっていた。確かにそうだろう。そもそも概念的には、一種類の土器だけで土器様式と見做すことはできないのが考古学の常識だからだ。

単純に言えば、それぞれの地域毎で、ある一時期に使われていた様々な種類の土器を一括りにした、つまり土器のセットが様式なのである。だからこそ、「重弧文土器＝免田式土器」では、様式概念としておかしい。そういう雰囲気が会場に漂っていたわけで、「成り立たない」などの意見が多数発せられたのも至極当然のことだった。

ところが、会場にいた高田素次は、違っていた。一九三七（昭和一二）年の『考古学』第八巻第一一号に、乙益重隆と共同執筆した「肥後国免田町本目遺跡出土の弥生式土器」（高田・乙益一九三七）（写真①）というお題の論文もしかり。東京日本橋倶楽部を会場に、一九三九（昭和一四）年一月八日に開かれた東京考古学会第一回総会での、「重弧文土器について」と題する講演もしかり（写真②）。高田自身が学界・学会デビューを果たした土器で（木﨑二〇一二a）、五〇年近く付き合ってきた土器なのだ。しかも、それは、郷土愛の象徴でもあった。そのことは、免田郷土研究会の機関紙『雑誌　郷土』の創刊号に寄せてくれるよう、高田からお願いされた乙益のエッセー「免田式土器名付けの由来」（乙益一九七三）を読めばよくわかること。関係する行を読んでみよう。



写真①　高田素次の学会デビューの証

「およそわが国の弥生式土器には全国にわたって、約一六〇種にのぼる様式名が設定されている。中でも、歴とした独立町村名を付した土器様式は、免田式土器だけ」

今でさえ、平成の大合併によって免田町は消滅してはいるが、それでも、あさぎり町の大字となって「免田」は

生き残っている。郷土愛の素地は、しっかりと残されたのである。

写真②　高田素次の学界デビューの証　前列左から４人目が高田

高田にとっては、会場の雰囲気は痛かったのだ。そんな雰囲気にいたたまれず、心の底からの、絞り出すように発せられた、高田の声が響いたのだ。

免田式土器が一般に重弧文土器に限られる傾向にあったのは、確かなことである。しかしながら、その傾向が様式を設定した小林行雄の思惑とはほど遠いこともまた事実なのだ。それは、南九州のB様式の脚注で述べた「この様式の土器の特に発達してゐる肥後国球摩郡免田地方にちなんで免田式の名称を用ひたい（略）」（小林一九三九）との記述部分（写真③）から明らかなことだ。要するに、免田式土器に様式概念が無いというのは、勘違いで、筋違いなのだ。

ところが「免田式土器」は、一人歩きした。なぜならば、「重弧文」という美しい文様で飾られ、そろばん玉の胴に長い頸を付けた、独特なプロポーションの重弧文土器がやはり目立ちすぎたからだった。「南九州B様式」として始まった「免田式土器」だったのだが、その独特な存在感が故に、いつしか「免田式土器＝重弧文土器」との認識が一般化され、定着していったわけだ。ここにまた、免田式土器に関わる考古学史の欠落があったのである。

そんなこんなで、筆者は、「免田式土器」を新たに使用しなおすことにした。それは、一九九三（平成五）

【註】(1)南九州地方の彌生式土器については從來まとまつた記述がない。肥後における小林久雄・坂本經堯・乙益重隆・高田素次諸氏、日向に瀬口傳九郎氏、薩摩に島田貞彦・木村幹夫・寺師見國・山崎五十麿・隈元靜哉諸氏等による報告があるが、樣式の問題が考慮せられたことは少なかつた。

(2)この樣式の土器の特に發達してゐる肥後國球摩郡免田地方にちなんで免田式の名稱を用ひたいと思つてゐる。

写真③重弧文土器（左）と小林行雄の「免田式」の提唱（右）

年五月から一九九四（平成六）年一月まで行った発掘した山鹿市蒲生・上の原遺跡の発掘調査報告書（熊本県教育委員会一九九六）の中で、だった。

そこで、高田と一緒に、再び叫びたい。「免田式バ使うてください」と。

【引用参考文献】
乙益重隆　一九七三　「免田式土器名付けの由来」『郷土』創刊号
木﨑康弘　二〇一二a　「球磨の考古地誌一五　高田素次の学界・学会デビュー」『週刊ひとよし』第七〇三号
木﨑康弘　二〇一二b　「球磨の考古地誌三七　免田式バ使うてください」『週刊ひとよし』第七二五号
熊本県教育委員会　一九九六　『蒲生・上の原遺跡―県営農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の調査―』
小林行雄　一九三九　「南九州B様式【注】（一）」『弥生式土器聚成図録』

方言を味わう⑰

供米代やゴミ袋に入れたなり

前田一洋

古来球磨・人吉地方では、米の収穫期である今ごろのことを「でけ秋」と呼び、村々町々の神様たちにも神殿からお出ましを願い、その喜びと感謝の意を、「祭り」として表現してきたのでした。人吉の青井さんや岩屋さん、多良木の天神さんやエべっさん等など。

なにしろその字が示す通り、八十八もの手間をかけて、ようやく稔りを迎えるのが米。しかも従来の水田耕作は、せいぜい牛馬に頼る他すべてが人手によって行なわれてきた。ことに田植えなどには、一人でも多くの手が欲しい。田の草取りから稲刈りも同じこと。

また稔りまでの途中には、恐ろしい風水害や病虫害が待ち受けている。とにかく〝むき出し〟の自然の中での仕事とあってみれば、至極当然のこと。それを少しでも避けることができないものだろうか、それどころかこれらを逆に生かす方法はないものだろうかと、農家の思いや願いは、それこそ真剣でした。

そのような祈りや訴えの場が小正月の「シュンナメジョ」や、夏祭りの「ろっがっどう（六月篭）」。人々はコウカンボや梶紙を使って人形を作り、種籾の入ったカマゲに立てて大勢の「やてーど」を願った。暑い最中にもかかわらず神仏の堂に篭もって精進潔斎、「どうぞ、太か風の来もさんごと。ウンカどもが付きもさんごと」と、祈ったのでした。

まあそのお陰と、百姓さんたちの努力や工夫、さらには村人たちの協力で、この嬉しい「でけ秋」を迎えることができたのでした。

今では農機具から肥料や農薬、はては圃場整備などが進んだために、昔のような苦労は随分と軽減されてきた。腰のつん切るるごと痛かった「刈っ倒し」やら「小手くびり」、更には月の明かりまで頼んでの「竿掛け」。庭にムシロを広げ天気を気にしながらの籾干、びんたからホコリをうちかぶっての籾すり。

こうし苦労がまるでウソのように解消され、どろころすれば〝県庁行き〟の服装で、コンバインに乗って田植えから収穫まで出来るように。広い田を作るところでは、機械が刈り取りから、袋詰めまでしてくれる。「なんちゅう楽になったもんじゃれろ極楽極楽」と。

そうは言いながらも自由化による米価の不安定、農業人口の高齢化、そして後継者難などと農村を取り巻く情勢は至って厳しい。かつては小作料や供出に泣かされ、今になっても泣き通しではないか。「ああ、百姓仕事どま早ようっちゃみゅうごたる」、そんな嘆きが方々で聞かれるのも無理からぬことですね。

しかし、もうちょい辛抱してみては如何。やがては新たな科学技術の進展で、梅雨時の雨量や気温調整から、台風の進路変更まで。それどころか農家にとって迷惑千万であった害虫や病気、それらがなんと肥料化されるまでになるのですよ。そして「でけ秋」になると一々農協に貯金を下ろしに行かなくても、コンバインが刈り取って、それを袋詰めにした籾どころか、現金の札束になしてドサッドサッと、運転席に積み上げてくれるのです。

これは聞き捨てならぬ一大事、そうなった時の話を是非伺ってみようではありませんか。

「こようちゃなア、まだ暗かうちからアシナカ踏んで、水の見回りじゃったで。蚊やら虻（あぶ）のくろて、ゆうとヌスこっじゃなかった」

「さいばたい、雨の日にゃミノ着てタカンバチかぶってじゃったでまい。照れば照ったで湯のぐたる田ん中で草取り。手まぜしおれば稲穂で目つくじる、足にゃビルのしゅっつくちゅうたふやで、なんぎなことじゃった」

「そいどん今はゆうなったもん、家ん中からリモコン一ちょで田植えからシノまで、いっそでくっげしなったでな。そして、おいぎゃへんな、去年おとどしの供米代（まだこんな用語が残っていて感動！）も使うちゃしまえんじに、ゴミ袋に入れたなりじゃっがな」

「ほんとん長生きゃしてみらんばんばい。こぎゃの良か世ん中ちゅうは、夢のごたる」

【まえだ・かずひろ／人吉市】

心がやすらぐ人吉・球磨

国土交通省八代河川国道事務所　元人吉出張所長　廣松洋一

人吉城跡から球磨川を望む。最高の眺望

人吉・球磨の皆さんお久しぶりです。平成21年～23年度に人吉市内で勤務していました廣松です。人吉を出てからもうすでに6年も過ぎてしまいました。3年間大変お世話になりました。今は転勤で福岡のほうに住んでいますが、今でも心のふるさととして人吉・球磨の風景が焼き付いています。地元の人にとっては当たり前の風景かもしれませんが、よそから来たものにとっては美しさ、やすらぎ、安心感をもたらす最高の本物の素材があちこちにあります。〝マイナスイオンがあふれでる街〟と自分勝手にネーミングし、やってくるお客さんに紹介していました。それでは、3年間過ごして感じた人吉・球磨の魅力を紹介させていただきます。

人吉・球磨の魅力は何といっても、清流球磨川が街の真ん中を流れており、高くさえぎるものが無く、街と川の一体感があり、その川沿いの河川通路から見られる水量豊かな清流に魅了される。

まずは、小高い人吉城跡に上って高い石垣沿いにあるベンチに腰掛ける。高い視点から大きな球磨川の水面が心地よく広がる。球磨川下りの舟がゆっくりと往来し、転落防止柵など何もないその無防備さと相まって開放感からか心がやすまる。ずっと座っていたい、時の流れがゆっくりと進んでいるようなそんな感覚になる。遠い昔から続くであろうこの風情は最高である。一番真っ先に案内したい場所である。

人吉城跡から水の手橋を渡り、河川通路を歩いて人吉大橋にたたずむ。散策をしてもらうことを意識してか大きな歩道が整備されている。その歩道のデッキから見える球磨川の清流が織りなす風景がすばらしい。そして川の真ん中に中川原公園がある。大きな樹木が数本そびえ、その木陰に入り球磨川のせせらぎを聞くと本当に気持ちが良い。なんとぜいたくな空間なんであろう。休日は野外テントが建ち並びアウトドアの達人たちを魅了している。県外から来る人で構成された中川原公園のファンクラブもあると聞く。

散策途中に川沿いのカフェに立ち寄る。大きく開いた窓のあるカウンターから川のせせらぎを見ながら、聞きながらコーヒーを飲む。地元にこだわるスローカフェ「人吉がもっと好きになるカフェ」がコンセプトとある。本当にそのとおりである。

また地区の子供会の活動の一環で、川水浴が夏休みに行われている。地元の素材を活かした大人と子供が楽しむ活動であり、「健全な街だなあ。」と感じる風景がそこにある。

また、散策とセットでくつろぎたいのが立ち寄りの温泉である。昭和レトロを感じるいにしえ度抜群の2～300円くらいではいれる温泉があちこちにある。特に休みの昼間からのんびりはいると幸せな気分になる。このずっと昭和初期からつづく人吉の良さが味わえる。

さらに、人吉から球磨川上流にちょっと足をのばすと清流日本一の川辺川が球磨川に注ぐ。川辺川のエメラルドグリーンの鮮やかな水の色に驚く。なんて美しい水なんだろう。

この川辺川から中川原公園まで、カヌーツーリングを地元の愛好者の

球磨川と中川原公園

新町自治会の川水浴

昭和初期からある元湯温泉

皆さんがやっている。一度カヌーに乗せていただいたが、開放感あふれる気持ちのよさは忘れられない。

そしてさらに上流に上ると、5月に錦町の広大な球磨川河川敷に咲くツクシイバラに出合える。ここにしかない野生のバラが咲き誇る。球磨川サイクリングロードを人吉から自転車で来ると、ツクシイバラの甘い香りの中をずっと身近に通ることができる。最高のルートである。帰りは自転車をくま川鉄道に乗せて疲れた体を癒やしながら帰る。球磨地方の田園風景を見ながらの鉄道の旅とのセットが実にいい。また、木上駅から歩いてすぐこの河川敷に行くことができるが、この無人の駅がしぶい。旅番組にでてくるようなタイムスリップしたような、駅のホームにたたずむと味わい深い。

まだまだ語り尽くせない人吉・球磨の魅力であるが、特別な観光整備などいらない、どこも真似ができない本物の素材があり、観光地としての潜在的なのびしろを感じさせる。「のんびり・ゆっくり・ゆったり」したい「何日もひたっていたい。」という、そんな気分にさせられる桃源郷の街である。福岡に住んでいるが、これからもたまに人吉・球磨にやすらぎをもらいに訪れたい。

【ひろまつ・よういち／福岡市】

清流川辺川。鮮やかなエメラルドグリーン

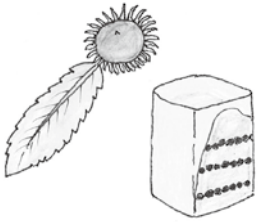
球磨川カヌーツーリング　人吉城跡付近の大きな水面

球磨川河川敷ツクシイバラの群生

おっとわっとあすび　その⑨

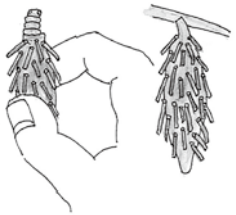
絵と文／松舟博満

ドングリムシ



ドングリん木の実ば、ずびゃぁひるっきとっさみゃ、セキタンガンの中きゃイモゴ（アカホヤ）ば二寸ぐりゃ敷いて、そんの上んドングリば並べっから、又イモゴば敷いて、そんの上んドングリば並べし、こっば何回かして薄暗か所けぇ置いてうぇて、温くぅなって出ゃぁて見れば、ドングリん産み付けられとった卵は、ドングリん実ば食うて殻ば食い破って、イモゴん中きゃくじっとったで、温うなってイヲどんが動きだせば、セキタンガンごめぇばちぐって、イゲムシん似とっムシばひりゃじぁて、こんだぁイモゴはっかりん中きゃ入れて、暗かとけぇ置いてうぇて、いっしこずつイヲ釣っぎゃ持って行きおった。

ミノムシ



木の葉ん青々しとっ頃れにゃ、どけぇおっかも一ちょん判らじゃったいどんが、木の葉んつこけて枝ばっかりんひなれば、小みんか枝んぐたっとば寄せ集めたくたっとのブラ下がっとっとが、ミノムシん巣で、メッチョ（メス）は一ちょもそん巣から外てにゃ出らじにゃおっとげなぁで、どぎゃぁして子どんの出来っとか不思議でなんじゃった。

こんミノムシゃぁ冬でんブラ下がっとったで、寒んか時んイヲ釣りにゃ、持ってこぃん餌じゃったで、巣んまま集めっからイを釣りん行たぁて、餌ば付くっ時ん「ミノムシサン・ミノムシさん・出てきやぃよ・出てこんば・わいが家は・びっしゃぐばい」て言いながら、巣の下ん方から親指と人差し指でもみ上ぐれば、ミノムシゃぁノソッとやってつら出すで、そこば巣から引き抜いて餌んしおった。

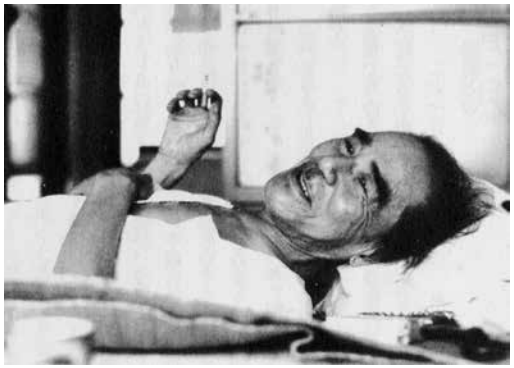
【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇神社・文化苑「童遊館」】

小山勝清 生誕一二〇年特集 ⑨

実姉・川邉みちがつづる 小山勝清の最期

上田精一

毎年十一月になると大叔父小山勝清のことを思い出す。二十六日が勝清の祥月命日だからである。勝清は母の叔父、私の祖母チヤの末弟だ。母が〝勝清叔父さん〟と呼んでいたので私たち子どもも皆〝勝清おじさん〟と呼んで親しんでいた。



熊大病院入院中の勝清（1964年）
小山勝樹著『父から息子へ』より

人吉橋の際にある手塚病院の前を通るとき、ふと道路側から二階を見上げるのがならいとなってしまった。

勝清はこの病院で二十六日午後八時に亡くなった。勝清の最期を看取った勝清のすぐ上の姉、川邉みち（当時、熊本県教育委員長）は「もう一人の武蔵ガンに死す―流転放浪、真実を求めつづけた作家・小山勝清の面影」（「文藝春秋」'66・5月号）の中でその最期の様子をこう綴る。

「弟は静かにこの世を去った。痙攣もなく、痰もつまらず、いつもの人なつっこい顔のまま、あの世に去っていった。剣の武蔵を慕いながら、今様武蔵として従容として死を迎えた弟―小山勝清を私は尊く思う。勝清は武蔵に自分の生き甲斐を見つけていたのではなかったか」。

私が勝清の死を知ったのは二女の郁子ちゃん（母がそう呼んでいたので私もそれにならう）からの学校（当時五木二中勤務）への電話だった。

「父が今朝とうとう亡くなったよ。眠るように逝ったのがせめてもの救いよ」と泣きながら伝えてきた。その数日前に病室を訪ねていた私は「ああ、ついに亡くなったか」と胸にぽかんと穴が空いたような思いになった五十二年前

（1965年）のあの日を思い出す。

晴山の自宅での通夜に五木村宮園から125ccの単車を飛ばした。遅くまで通夜の酒を飲んだ。おみちおばさん（と母にならってそう呼んだ）が、「精一は大学病院にもよう来てくれたね。勝清はあんたが来っとば待っとらしたもんなあ。精一はあんまの上手と言うてなあ。手塚病院にも何遍も来てもんでくれてありがとうなあ」と礼を言った。

「文藝春秋」
1966年5月号

痩せおとろえた身体はまさに骨と皮ばかり。もむところはなかった。ただわずかに残る肩や腰の筋肉にはしこりがあった。それを手の平でさすると〝あ、よか気持ち〟と喜んでくれた。腹がパンパンに膨れ、脚も異常にむくんでいた。そこを同じく手の平でさすってあげると気持ちよさそうに眠りに落ちて行った。

「精一、勝清が眠っているうちに帰んない」とおみちおばさんに言われ、「勝清おじさんが目覚めてから気の毒っか」と言いつつそっと病室を出たものだった。

勝清が逝った翌年〝おみちおばさん〟は「文藝春秋」五月号に追悼の文章を発表した。わずか九ページの小編ながら何度読んでも胸が熱くなる。弟への愛に満ちあふれた勝清像が活写されている。勝清の波乱万丈の生涯がみごとに描かれた珠玉の文章だと思う。

十一月になると書棚からこの本を取り出し、勝清おじさんを、そしておみちおばさんを偲んでいる。

その文章の掉尾（ちょうび）にこうある。

「死の近きを知ったとき、弟はこの『故里の山』を見て死にたいと、医者や看護婦のとめるのもきかず、熊本の大学病院から故郷人吉市の病院に転じた。（中略）人吉の病院では、絶望を伝えられながら、三ヵ月生命を長らえた。医者でさえ奇跡であると不思議がり、まったくの精神力だと賞賛した。この精神力で、弟は最後まで武蔵に負けじと筆をとっていた。見えぬ眼と力ない手を動かしつづけた弟は、生死の境を彷徨しながらも、『民俗主義文学論』『武蔵は生きている』等を書き上げたのである。いま私は、生まれてはじめて、あっぱれであると弟を賞めてあげたい」。

【うえだ・せいいち／人吉映画センター代表、人吉市】

人吉市出身の福田さん「日本翻訳文化賞」受賞

人吉市出身で熊本大学名誉教授の福田昇八さん（84＝熊本市＝はこのほど、日本翻訳家協会が主催する文学賞「日本翻訳文化賞」を受賞した。

福田さんは終戦直後の人吉高校生の時、英語クラブを創設して後輩を指導するなど、頭角を現していた。

今回は九州大学出版会から刊行された「韻文訳―妖精の女王」での受賞で、原詩の行の音節数を七五調に置き換え、原詩の行の長さと韻律の響きを忠実に反映させている。原詩の意味を伝えるばかりでなく、音楽的リズムで読者を楽しませる日本語への訳出が高く評価された。

10月20日には東京都で表彰式も行われた。

福田昇八さん

《福田昇八氏略歴》

1933年人吉生まれ（人吉高校3期生）。東京大学文学部英文科卒業。熊本大学教養部助教授、熊本大学教育学部教授などを歴任、その間米国ワシントン大学大学院留学、英国オクスフォード大学研修などの経歴もある英文学者。現在、熊本大学名誉教授。2012年には、瑞宝中綬章受章。特に英国詩人エドマンド・スペンサー（1552～1596）の長編叙事詩の翻訳をライフワークとしている。学術書レベルの『スペンサー詩集』、『イギリス・アメリカ文学史』の著書をはじめ、『妖精の女王』、『スペンサー名詩選』などの共著、少し柔らかなところでは、『語学開国』、『ビートルズの心』、『英詩のこころ』、『話せない英語教師』などの著書もある。

本誌では今回の福田昇八さんの受賞を記念して、人吉高校時代のことや翻訳に関して綴られた一文を掲載させていただきます。福田さんへのメッセージなどお届けくだされば、幸いです。

（編集部）

人高第三回卒業生喜寿記念文集「世紀を越えてⅡ」（2010年発行）より

中二階の仲間たち

福田 昇八

五十歳の頃から私は四時起きになった。庭に出て星を眺めながら屈伸運動をし、神佛を拝んで机に向かい、英書を広げて一仕事する。毎日が日曜日になった今も、昼までは英語と暮らす日々を続けている。このような英語との関わりの源流をたどれば、それは木造二階建て人吉高校本館の中央に、ひっそりと頭を出していた中二階の部室にさかのぼる。喜寿の年を迎え、ここにあの懐かしき日々のことを記してみよう。

人は誰でも運の女神と出逢うが、それを掴まえるかどうかは本人次第のようだ。西洋では、運の女神の頭は後ろが禿げているので、一度通り過ぎたら捉えられないと考えられている。それで英語では、「運を前髪で捉える」という言い方をする。私の場合、終戦の翌年から放送が始まった平川唯一講師の英語会話講座が高校卒業の年まで続いたこと、これが最初の運であった。私はあの好機を前髪で捉まえた。それがわが将来を決めた。これからは何事をするにも英語が話せなくては話にならぬ時代になる。大学は東京に行こう、東京の者はみな英語が話せるだろうから負けてはならぬ。私はそう思い込んでいた。このような考えの田舎者には、「赤ちゃんのように、口まねさえしていれば、誰でも英語はしゃべれるんですよ」と語りかけるカムカム小父さんこと平川先生の声は、正に干天の慈雨であった。私はこれをフルに利用した。夕方十五分間の放送を、停電でラジオが聴けない時以外は一度も逃さず聴いた。

いつか兄弟揃って筍掘りに行ったことがあった。歩いて一時間ほどの所の竹山だが、帰る時になって気づくと、

もう歩いては六時の放送に間に合わない。それで走った。息急き切って駈け戻り、ラジオにかじりついた。純真な少年の気持ちをそれだけ駆り立てる魅力が、平川先生の声にはあった。

平川英語は、日本人の日常を題材にした会話、家族の言葉であった。例えば、こんな具合である。

「あら、太郎、どこ行ってたの?」
「山に筍掘りに行ってたの。」
「沢山採れたかい?」
「うん、あそこには目白もいたよ。」
「そうなの、あたしも行きたかったな。」

この会話は五行だが、これが一日の分量である。一週分はこれの五倍になる。それを繰り返し声に出して言って、すらすらと言えるように丸覚えする。週に二十五として、月には一〇〇になる。一年では一二〇〇になる。私は四年間聴いたから、かなりの英語表現を覚えたことになる。「言葉は親から習う。外国語として習う場合も、家族の言葉を身につけることが第一です。」という平川先生の言は、まことに正しい。学校英語は、「文法的に易しい項目から順番に」という考えに基づいている。現在形を習ってから過去形、現在完了、仮定法と進む。ところが平川英語では、筍掘りの例話に明らかなように、最初から過去も現在完了も仮定法も出て来る。それが現実の会話である。私はこのような母国語方式で習っていたわけで、これはまことに幸せな巡り合せであった。

単語の綴りは後回しにしてよろしい。まずは赤ちゃんのように、文章全体を口まねしよう。「誰でも口まねで覚えられます」とは、そういう意味であった。どう書くかは忘れてよい。単語の発音を辞書にある通りに言うのでなく、文章の中での音として覚える。それだけでよい。

会話は、相手の言った内容を即座に理解し、直ちに英文で答えることだ。英作文のように、ゆっくり考えている暇はない。英会話とは、考える時間を与えない英作文なのである。だから、英会話をやれば英作力も付く。これは私の実感だった。

さて、英会話の一方、私は受験参考書も手に入れて勉強した。高校二年の時には全国の入試問題集を全部やった。全校英語実力テストでは一位になったこともある。こうした実力に基づいて、二年生の終りごろ語学部の創立を呼び掛けた。これに応じて三十名ほどの部員が集まった。

部室には学校側から特別な部屋が提供された。当時の木造二階建て校舎には、屋根裏を見ながら狭い階段を二回曲って登る中二階があった。中は八畳ほどあったろうか、四方が見渡せる眺めの良い部屋だった。国見櫓のようなあの珍しい部屋がどういう目的で造られたのか知らないが、建物の正面から仰ぎ見れば、立派な飾りになっていた。

ここに毎日、昼休みを利用して全員が集まり、私が講師役をして前日放送分の復習をした（部員の中には、家にラジオがなくて放送が聴けない者もいた）。月曜日は前週の英文を活用したテストをした。私が読み上げる二〇の日本文を英文に直して書くテストだが、時間は一問一分しかない。答案は私が添削採点して翌日返した。あの頃の問題文は今も私の手元に残っているが、これだけやれば、入試の英作文問題も楽に解答できたろうと思わせる内容である。

この部活動は、会話の勉強会に留まらず、そのうちに他の科目も勉強し合う私塾の役割も兼ねるようになった。高校生になった頃から私は、月の初めに計画を立てて勉強していた。英語は対訳本を図書室から借り出して月に一冊は読んでいた。同時に、数学から理科、社会まで、参考書を選び、日に二ページのように分量を決めて自習していた。毎日の実績を書き込んで行くグラフまで自分で考え出していた。私はこの勉強法を部員にも勧めたのである。こうして各人は自分の好きなように毎月の予定表を作って家で勉強し、月末にグラフを見せ合うようになった。もっとも、私には何でもなかったこの方式も、多くの部員には無理だったようで、一糸乱れずとは行かなかった。

今は学校教育についての議論が盛んだが、教育の中心は生徒であることを忘れてはなるまい。本人が進んで勉強することが第一である。今はこの点を顧慮せず、朝課外、夕課外と生徒の時間を奪っている進学校が多いと聞

くが、幸いにしてと言うべきか、我々の時代に課外は無かった。各人は好きなように振舞えた。我々の部には顧問教師もいなかった。英会話を勉強するという上級生の呼びかけに応じて下級生が集まり、ごく自然に、上級生が下級生を教える形で勉強し合ったのである。それを我々は自発的に実行していたわけで、この点、日本の学校教育史上、全国的にも珍しいクラブ活動をしていたことになるかもしれない。

あのラジオ番組は、カムカム・エブリバディのメロディーに乗って、空前の人気番組になった。「誰でも赤ちゃんになったつもりで口まねごっこをしていれば、自然と英語が話せるようになりますよ」が、平川講師の口癖だった。こんな結構な番組が、ただで聴けたのだから、誰でも英語力増進が図れたはずである。ところが、この運の前髪を捉えた者は、日本中見渡しても、そう多くはいなかったらしい。あの中二階に集まった仲間たちの中からは、授業では全く習わずに、英会話力を身に付けて高校を卒業する者が出た。家族英語を学び、英語の語感を身につけるほどの英語力は、学校英語では物に出来ない。戦後六〇年を見渡しても、あの中二階の仲間ほど英語らしい英語を身に付けて卒業した生徒を持つ高校は、日本広しといえども多くはあるまい。

このような語学部の活動は、私が卒業した後も代々引き継がれた。ＮＨＫからの放送は私が卒業した昭和二六年に終ったが、その後、同じ番組が民間放送局から放送されており、部活動はそれが終了するまで続いたのである。このような付き合いを通じて私が得た人間関係は、私の一生の宝になった。私が直接教えた二つの学年の人たちはもとより、私の卒業後に進学した三学年下、四学年下にも、半世紀を経た今もなお親交のある人たちがいる。お陰で私は、当時の後輩から、あの中二階での経験が今の自分を支えているという言葉を耳にする幸運に恵まれている。

高校卒業後の私は、英会話とは無縁になる筈であった。大学に入ってみたら英会話では東京の者よりこちらが上と分かり、そこで英会話とは縁を切ったつもりであった。実際、教養課程の二年間は、専ら西洋の言葉をギリシャ語・ラテン語まで勉強し、毎晩遅くまで各国語の辞書引きをしたものである。その後は英文学研究に入り、五十年前、皇太子ご成婚の春に熊本に来てからは、象牙の塔で安楽な一生を過ごすはずであった。

ところが三〇代半ばになって、ライシャワー元大使から受けた示唆を地元で実現するという「運」を引き寄せてしまい、中学高校英語教員のために本邦初の二ケ月の集中研修を企画運営する羽目になった。その結果、アメリカから講師を招き、年に五回の研修会運営を一手に引き受けることになった。その後も規模を縮小してこの事業を継続し、二十年間にわたる奉仕となった。世話をした講師三十人、受講者六百人に及ぶ事業を（大学での仕事もフルに果たしながら）事務員も雇わず処理したが、参加者自身が大いに自主性を発揮したし、講師の世話など協力してくれる人が何人も居て、うまく切り抜けることができた。

「話せる英語教師」をつくる事業は、私に語学部運営の経験があったからこそ可能になったことであり、元をたどれば平川先生のお陰であった。私はそう考えて、最初の四年計画が終了しその成果を本にしてから、世田谷の平川家を訪れてお礼を述べた。それをきっかけに、昔のラジオ・テキストの復刻版などの出版を手助けすることになった。東京にも平川ファンは大勢いたのに、平川英語の再評価は、九州の者が引き受ける結果になった。

私の専門は四百年前のイギリス詩人エドマンド・スペンサー研究である。この面で私のライフワークとなるスペンサー韻文訳の仕事は、いま完成に近づきつつある。中二階の活動が嵩じて、専門とは関係ない分野にまで手をのばしたが、お陰で幅広く世間を知ることができたし、何かをなしたという充足感を得ることができた。

振り返ってみれば、山紫水明の地で生まれ育ったのも、思い通りに仕事をやれたのも、それをなす体力と気力と知力を与えてくれた、今は亡き親のお陰であり、毎日を共に生きて来た家族のお陰である。このような肉親を持ったことがわが人生最大の幸運であった。そう言えることが私の喜びである。

（２０１０年８月15日）

復刻掲載

字図で見る球磨の地名 ⑲

上村重次

淡島（アハシマ）

―山江村　万江乙―

山江村万江を流れる万江川（球磨川支流）に沿った県道をたどると、中流付近に淡島神社がある。この一帯が万江字淡島である。熊本県内では宇土市新開町の粟島神社が三月三日の大祭に行われるミニ鳥居くぐりで有名であり、各地の淡（粟）島神社は海浜に鎮座する例が多いのに対し、万江の淡島神社は海から遠く離れた山里にある。

〝アワシマさん〟は和歌山市の式内社・加太神社（淡嶋神社）を根本社として全国に分布する。祭神の少彦名神は『萬葉集』巻十八・4106の長歌

おほなむち　すくなひこなの
於保奈牟知　須久奈比古奈野
かみよより　いひつぎけらし　ちちははを
神代欲里　伊比都藝家良之　父母乎
みればたふとく
見波多布刀久…

と詠まれている。また『日本書紀』では少彦名命は淡路国で粟茎にはじかれ常世の国に行ってしまわれた神であり、その粟は保食神の額に生じた穀物ということになっている。

米一升は64827（むしやふな）粒に対し粟一升は百万粒といわれる。このように小粒の粟と少彦名神が結びつき、粟と〝アハ地名〟をからみ合わせた神話として全国に〝アワシマさん〟が祀られるようになったのであろう。『日本地名索引』をみると、アワシマの表記は淡島・粟島がほぼ半数ずつという点からも地名説話と穀物由来説の融合が感じられる。

山江村万江乙字淡島は淡島神社鎮座地に由来すると思われるだろう。ところが『球磨郡誌』には「淡島神社　萬江字淡島に鎮座し、祭神は少名毘古那神である。草創の年紀は詳でなく、従来民家の邸内社にして、一家の鎮守であったが、明治十一年十月十六日、邸内と区別し、神祠及び社床を建立し、淡島神社と称することとなった」とある。

この記述からすると、淡島神社よりも地名の淡島が先行するようである。少彦名神を屋敷神としてきた民家が、古い時代にあった淡島神社の社人の子孫という可能性もあろうが、実証は困難である。拙著『九州相良の寺院資料』によると、淡島神社近くの淡島阿弥陀堂には文明十一年（1479）銘の木彫阿弥陀如来立像があり、淡島地区の古さがしのばれる。人吉―照岳―肥後峠―鮎返―八代のルートは肥後と球磨を結ぶ古代路であって淡島付近はその経路であったと考えられるものの、淡島地名の由来を知る手がかりはつかめない。

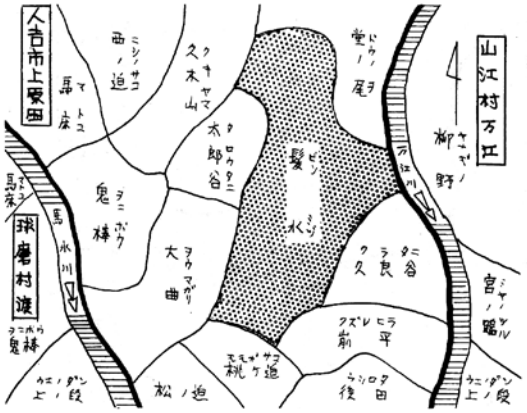
しかしながら前回、五木村端海野で思いついたヒントを援用すると、淡と端の音が近い関係で端島（ハジマ＝境地）がタンジマと音読されて淡島が当てられ、アハシマと訓読されるようになったことも考えられる。これは推理に過ぎないが、淡島は人吉市原田との境界地名であることは事実である。

髪水（ビンミズ）

―人吉市　上原田町―

髪水は照岳（テルカク、806・3㍍）の南麓にあり、東は万江川を境界にして山江村万江甲字柳野（ヤナギノ）と向かい合う。人吉市の現行字名はビンスイと訓じてあるが、明治前期の訓仮名はビンミヅである。

普通名詞のビンミズは鬢水と書くが、髪をくしけずるのに用いる水のことだから髪水と当て字したのであろう。鬢水を入れる器は泔坏（ゆすろう）。



【おことわり】本連載は平成6年から9年にかけて執筆されたものの復刻版です。あえて合併前の町村名をそのまま使用しています。

るつき）と呼ばれたが、これは鬢水が強飯（おこわ）の蒸し汁であるため、湯汁がエスルに転化した語とされる。山鹿市鍋田字湯摺水（ユスリミズ）は鬢水の古語と考えられる。

土地区域と鬢髪は関係ないが、ビン地名は珍しいことではない。天草郡天草町高浜字鬢ノ水（ビンノミズ）は人吉の髪水と同意地名であろう。阿蘇郡阿蘇町的石と永草には村界を挟んでそれぞれに字鬢掻（ビンカキ）があり、「阿蘇大明神が髪つくろい（鬢掻）された所」と言い伝えられる。

このほか変化系としては牛深市牛深字鬢掃除（ビンソウジ）、天草郡新和町中田字便午房（ビンゴボウ）、菊池郡泗水町住吉字備後塚（ビンゴツカ）、鹿本郡鹿北町椎持字瓶焼（ビンヤキ）、四国の愛媛・高知県境の瓶ケ森（カメガモリ、１８９６㍍）、徳島・高知県境の貪田丸（ヒンデンマル、１０１９㍍）などもビン系地名に分類できよう。

寛元二年（１２４４）の人吉庄起請田以下中分注進状（『大日本古文書』家わけ５「相良家文書之１」）に〝貧霍山之道…〟という地名が見え、前後に出る地名から〝貧霍山〟は村山台地縁辺にあったと推定される。南九州ではツルに水流を当てるから〝貧霍〟は〝髪水〟に酷似した表記とみることができるものの、上原田町の髪水とは関係なさそうである。

以上によって、ビン地名の発生は古く、全国的な分布であることがわかる。では地名用語の〝ビン〟は何を意味するのだろうか。四国の〝貧田〟はビンタとも読める。『大言海』には「びんた　鬢のところ」とある。球磨では頭もビンタであり、頭髪はビンタンケと言うが語根は鬢であることは明白。

旧軍隊用語のビンタは横っ面を殴ることであり、左右から殴るのは往復ビンタだった。ビンタという語は田舎くさい方言のイメージであるが、元をただせばレッキとした漢語の鬢に和語のタ（所）が添えられた古語である。

地名用語の髪水は〝土地区域のビンタ〟の表現で、〝水〟は水縄（基準線）の意であろうか。山江村万江甲字柳野と原田の髪水が対応するのは柳地名が梁→橋→端から生じた境界地名の故であり、双方のムラがこの地に特別のビンタ意識を持っていたことも考えられる。

【うえむら・しげじ／宇土市生まれ、元熊本日日新聞社記者】

倉敷便り ⑪

原田 正史

高原・千敷原
今昔物語

今昔物語といっても私が見聞きしたものですから、昭和十年代以降のことになります。球磨郡の高原（たかんばる）という土地の存在を知ったのは、父親の転勤に伴って湯前村（現湯前町）から、上村今井（いまい）、堀之角（ほりのすみ）（現あさぎり町）に転居した時のことでした。

転居先は、松岡焼酎醸造元の隠居所をお借りしたものでした。そのうちに私の母が醸造元の奥様の案内で、高原にナバ（椎茸）取りに連れて行ってもらうことになりました。奥様の話によると、高原の中央部には広い松林があり、その周辺部には松林を取り囲んで、これまた広い原野が続いており、この原野がナバ取りの場所だとのことでした。また、ナバ取りに来た人の中には、ナバ取りに夢中になり、松林の中で迷い込んでしまい、大騒ぎになったことが何度かあったそうです。松林が広い上に、平原林であることから方角が定まらず、真っすぐ歩いているつもりでも曲がってしまい、松林の中をぐるぐると廻り続けることになるのだそうです。奥様の話を聞いて、ナバ取りに誘われても、そんなに怖い所には決して行くまいと思ったものでした。

私が初めて千敷原（ちしきばる）に足を踏み入れたのは、中学校低学年の頃で、海軍の飛行場が建設される予定地がどんな所か見ておきたかったからです。学校から連れられて行ったと思うのですが、道順なども覚えていません。場所は木上村山下から少し北西方向に入り込んだ千敷原東端部だったような気がします。もともと畑地だったと思われるこの付近には、高さ２ｍほどの広葉樹が一面に植林されていました。草が点々と生えているだけの、見るからに痩せ地そのもので、作物の生育が悪く、植林に転換したものと思われました。

千敷原は高原と同じように、古い時代に加久藤溶結凝灰岩（ようけつぎょうかいがん）の基盤上

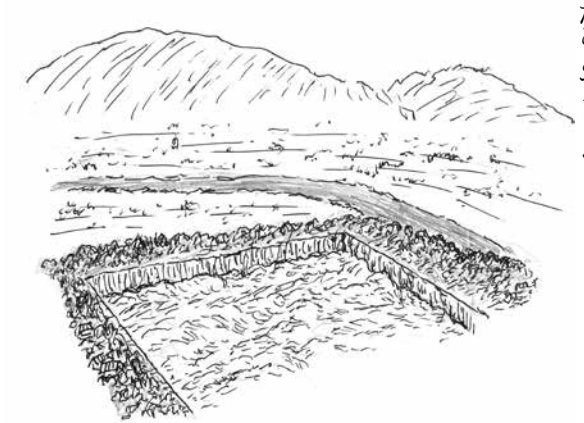
に川辺川が上流から運んできた砂礫層が堆積したものですから、その表土層はよそから飛来した火山灰だけから出来ているのです。したがって養分に乏しい酸性土壌なのです。球磨川や川辺川流域の低平地が洪水の度ごとに上流から養分に富んだ土が流れてきて堆積し、肥沃（ひよく）な土壌が形成されるのと全く異なっているのです。

旧制中学五年生の頃には学徒動員となり、私たちの主要な生活の場が千敷原になったことは既述したところです。動員が開始された最初の頃には全員が学校に集結して、隊列を組んで飛行場に向かいました。

その後、私たち湯前線の汽車通学生には、肥後西村駅での途中下車が許され、球磨川を渡って直接飛行場へ向かうことが出来、大変便利になりました。この頃になると郡内各地から多くの人たちが勤労奉仕のために飛行場にやって来ており、湯前線沿線に住む人の殆どが、列車を利用したことから、集合時間前になると肥後西村駅前は大勢の人で溢れかえっていました。

飛行場へ向かう途中の球磨川には、ビャーラ橋（仮橋）が架けられていました。しかし駅から仮橋の間には道は無く、人々は思い思いに田んぼの畔を踏んで、右へ左へと曲がりくねりながら進みました。そのうちに田んぼの真ん中を横切る者が出てきて、数日の間に駅と仮橋とを一直線に結ぶ長さ約４００ｍの新しい道が出現しました。これには横着なことでは一人前の私たち中学生もさすがに呆れかえりました。私たちの中で、人様の大切な田んぼを突っ切るような行動をする者は一人もいませんでした。戦争一色に染められた時代であって、勤労奉仕に向かう不特定多数の人たちの仕業（しわざ）であることから、田んぼの所有者は、泣き寝入りするしか無かったものと思われます。

仮橋を渡り、そこから続く細い道を上ると、千敷原の平坦なところに出ます。道の西側には井沢（いざわ）の集落地が広がります。井沢で一軒だけ集落地から外れている家があり、阿蘇溶結凝灰岩からなる千敷原側端崖下の球磨川川岸にありました。その屋敷内には当時、納屋にされていた末端崖基部に掘られた先鋭なアート形の穴居洞（けつきょどう）が存在していました。残念なことにこの穴居洞は、戦後の河川改修によって、屋敷諸とも完全に削り取られてしまいました。もし現存するならば郷土を代表する貴重な文化遺産として、内外の注目を集めたことでしょう。



さらに千敷原では誘導路が井沢集落の北側近くに達した時、加久藤溶結凝灰岩製の石棺が掘り出されました。内部を鮮やかなベンガラで塗られた石棺は、複数個だったように思われます。どのように処分されたのかは不明です。

戦後になり自動車を使う時代になると、千敷原を通ることが多くなりました。しかし飛行場跡地に行ってみようという気持ちは余りありませんでした。ここに残されている記憶には、苦しいことや悲しいことばかりだからだと思われます。それでも滑走路がどうにか原型を留めていた時に一回だけ訪れたことがありました。滑走路は自動車免許を取得しようとする人たちが、タダで使用できる格好の練習場として永年にわたり使用されたらしく、舗装のセメントはバラバラに砕かれ飛び散り、地面が剥き出しになった所も数多くありました。それだけに、このまま使用が続けられると滑走路が原形を消失するのも時間の問題だと思われる程の哀れな状態でした。

その次に飛行場を訪れたのは平成二十三年頃だったと思います。そこには私の予想を遙かに越えた驚くべき現実が待っていました。それは、滑走路の原形喪失という部分的なことではなく、飛行場跡地の地面が千敷原南半分の側端部を除いて完全に消え失せていたのです。そしてその滑走路があった所には、深さ数十メートルにも及ぶ砂利採りの掘削孔があちこちに空いていたのです。高く低く乱雑に並んだその掘削孔の惨

憺たる光景を多くの人に見ていただきたいと思います。

歴史的遺産として末永く保存されるべき人吉海軍航空隊飛行場跡地は、人の無知や利欲のためになす術もなく朽ち果てたのです。また何をか言わんやといった心情です。

これまで人吉海軍航空隊に関する記述を続けてきましたが、部分的な事実については未だ数多く残されてはいるものの、主要な内容については、すべての記述を終わり、私の記憶に残されている真実を後世に伝えるという目的を達成できました。従いまして次回からは、「倉敷だより」本来の内容に戻ることとします。

【はらだ・まさふみ／元人吉市文化財保護委員、倉敷市】

くまがわ春秋歌壇

いもご短歌会

こぼれ萩訪ねる家の庭先で立ち止まりてはしばし眺むる
秋の畑紫紺の茄子のぶらさがり忘れられしか風の吹くまま
三原　竹二

秋めいて葉陰にのぞく柿の実の少し色づき「ここにいるよ」と
惜しまれて閉じた産院庭先にみごとに咲きし芙蓉の花が
坂本　ケイ

清流をせきとめていしダムが消え青き流れに鮎釣る人も
思春期の孫だみごえでわめきおりわが子育てしころの懐かし
上田　廸子

子も孫も戦後生まれで一生を終えて欲しいと投票に行く
二歳児は運動会終え走り出すごっこ遊びのまだ冷めやらず
宮川しのぶ

忘れずに咲く彼岸花忘れいて思い出せない老いの辛さよ
いつもより遅く咲きたる彼岸花そよ風にゆれ秋を告げおり
吉岡　弘晴

「国賊」のことば飛び交う世となりぬ戦後は去りてもはや戦前
野党ゾラしたる「希望」に惑うまじ与党補完の政策ずらり
上田　精一

外来語から学ぶ英単語（20）……藤原　宏

ジョイン・ジョイント・ジャンクション・ジャンクチャー
join　joint　junctin　juncture

ラテン語「**jungere**（イゥンゲレ）、つなぐ」から派生したことばです。この語がフランス語「**joindre**（ジュワンドル）、結びつける」を経て借用されたのが「**join**（ジョイン）、接合する・協力する・合併する・合流する・参加する・加入する」です。

joint（ジョイント）・**junction**（ジャンクション）・**juncture**（ジャンクチャー）はラテン語の動詞 **jungere**（つなぐ）の過去分詞形「**junctus**（イゥンクトゥス）、連結性の・接合性の」からの派生語で、「接合（点）」の意で共通しています。

joint は「**knee**（ニー）**joint**（ひざ関節）」のように「継ぎ目」の意の他に、「合同の・共同の」の意で多くの合成語に使われます。

「**a joint concert**（コンサート）、合同演奏会」
「**a joint venture**（ベンチャー）、合弁企業」

junction は「道路の交差点・乗り換え駅・川の合流点」など、結合の現象やその地点のことで、一方 **juncture** は、結合時点での局面や重要性を意味することが多いようです。「**conjunction**（コンジャンクション）、接続詞・結合・共同」も同系です。

(386)

ひろしの…げっかん・ぎひょう

―対北朝鮮との対話を否定。「軍事」を容認―

平和的な解決のための対話を重視すべきなのに、圧力を最大限に高めていくことで一致。安心できないとの声広まる。

マイ・文庫本

カズオ・イシグロ『忘れられた巨人』失われた記憶をもとめて

白城松男

原タイトルは、The Buried Giant。2015年3月3日にイギリス・アメリカで同時発行。

フェイク

作家・村上春樹のファンをハルキストという。イシグロはもしかしたら、ハルキストかもしれない。それとも村上春樹がカズオニストか。いずれにしても、二人のスタンス・モティーフは同じところで息づいている。人の記憶が曖昧であること、曖昧さを通りこして失われてしまうときもあること、それにもかかわらず人は過去の記憶をとりもどそうとする衝動につきうごかされることを二人は知っている。村上春樹の場合、フラシュバックする記憶の破壊力の強調がそれに加わり、イシグロの場合、事実操作性の危険性の自覚がそれに加わる。

記憶の回復は学問としての歴史学の課題だが、学問とは別の個人の人格的課題でもある。その作業は、単調なようにみえて、本当は、窒息してしまいそうな緊張を人に強いる。抹消したい記憶については特にそうだ。過去の思い出がすべて楽しいわけではない。抹殺したい記憶もある。楽しい記憶でも事実そのものの記憶でなく誇張され変形されることがある。辛い出来事の場合、その傾向はいっそう強まる。あまりにも辛すぎるときには、人はそれに耐えられず、記憶からそれを抹殺して「なかったこと」にし、あるいは「別の記憶に塗り替える」。それは自己防衛の行動で、そのようにすることが主観的幸福のためによいときもある。人間関係（たとえば夫婦関係）を維持したいとき喧嘩の記憶は失われたほうがいいかもしれない。喧嘩自体の記憶は残っていても、その原因についての記憶は失われた方がいいかもしれない。「寝た子は起こさない」には、一片の真理がある。

しかし、いつも、そうはできない。喧嘩の記憶が増幅し、喧嘩の原因が相手の人格の欠陥に拡張されるときもある。記憶がすべて改訂されてストーカー的な行為になる病的状況になるときさえ稀ではない。個人史だけではなく、集団の記憶もそうだ。戦争の歴史は分かりやすい。戦前日本の戦争を侵略戦争とみるか防衛戦争とみるべきかという「論争」は一例だ。一方は他方をヒステリックに批判し、相手を罵倒するだけの世界を生み出したりもする。そうした記憶の「分裂」はフェーク（不都合な真実の隠蔽）への回路を準備する。たとえば沖縄の人は米軍の存在を雇用が保障されるので本当は喜んでいる、基地反対運動は賃金引き上げ・補償交渉を有利にするための駆け引きにすぎないといったフェーク（誤った事実）をたまに耳にするが、米軍基地を肯定する思想回路はそうしたフェイクをも創り出すのである。悪意でなく本気でそうしたフエークを人は信じる。国家による一方的情報発・批判の封殺だけがフェークを生みだすのではない。言論が自由に流通しているときにも「善意のフェーク」は生じる。

『忘れられた巨人』
カズオ・イシグロ
土屋政雄訳（早川書房）
平成15年10月25日

老夫婦の旅

イングンランド（イギリス）は最初からイングランド（イギリス）ではない。ブリトン人の土地にサクソン人が入り込み（侵略し）、ブリトン人はそれに反抗した。ケルト人の抵抗もあった。ノルマン・コンケストもあった。それらの積み重ねのなかでイングランドは存在している。

ブリトン人の反抗はアーサー王を生み出した。アーサー王は「伝説」で、存在しなかったかもしれない。それにもかかわらず伝承が重ねられて伝説は生まれた。伝承・伝説には過去の記憶が閉じ込められている。

主人公の老夫婦は、アーサー王が世を去ってしばらく経った頃の時代

を生きている。歴史学的には6世紀頃のブリテン島のサクソン系住民ということになる。老夫婦の住む村は20人ほどの小さい集落で、住民は共同体的労働に従事している。個人的労働でなく、労働は住民の義務である。老夫婦は共同体の秩序に反する行為（それがなにであるかは分からない）をおかし、ロウソクの利用を禁止されている。それと関係しているかは不明だが集落の端で生活している。老夫婦は別の村にいる息子に会いたいと考えるようになった。集落内でイジメを受けているからではない。それとは別の衝動から息子に会いたいと考えた。老夫婦は息子が別の村にいることは知っている。しかし、なぜ、別の村に息子がいるのか、なぜ、いつ、息子が村を出ていったのかは記憶していない。歳をとりすぎたなのか。それとも別の理由からか。二人は、いつから、息子に会いたいと考えるようになったかを覚えていない。ときには、息子に会いにいく旅の話題を避けるときもあった。しかし、ついに、息子に会いに旅にでる。老夫は老妻を「姫」とよぶ。なぜ、「姫」と呼ぶのか。

老夫婦は息子を探す（会いにいく）旅にでた。しかし息子のいる村がどこにあるのかを知らない。旅をつづけるなかで事実がしだいに判明していく。老夫婦は息子を探しだすことができるのだろうか。息子はいなくなった理由を知ることができるのだろうか。記憶が失われていくなかで老夫婦は最後にはどうなるのか。老夫は老妻を最後まで「姫」とよぶのだろうか。そもそも、なぜ、「姫」か。

埋められたものはなにか。

原文タイトルは「The Buried Giant」。「Buried」を直訳すれば「埋められた」、「埋葬された」になる。「忘れられた」ではない。「Giant」はどうか。複数形でなく単数形だ。粗筋は複数ある。しかし、テーマは一つということか。

★カズオ・イシグロ。１９５４年11月6日長崎市生まれ。１９８３年にイギリスに帰化。２０１７年、ノーベル文学賞受賞。

【しらき・まつお／八代市】

鶺鴒（せきれい）短歌会

九月詠草

海を背にとぎれとぎれに木霊する「みすずの詩」の甦りきて
秋彼岸桜紅葉の色づきてぬけ殻残して蝉の声なし
守永　和久

長月の作見の彼の茶話会は「ことしも良」と声弾みをり
はらからは怪我も癒えて退院す「又牛乳を」に涙腺ゆるむ
河内　徹夫

「もてなし」は年経る毎に危惧さるる日本遺産の観音巡り
いつになくこの新聞の重たさよ級友（とも）の名前を死亡欄に見て
中村美喜子

幼児期の利き手矯正箸と筆小学時代はトラウマとなり
八十になれどまだまだ旺盛に里山刈りて閑の語らい
西　武喜

おめでとう朝のあいさつ聞きし夫「八十四歳迎えたるかと」
萩すすき咲きてわが家も秋模様どうにか二人で酷暑のり切る
釜田　操

八十が目の前に有り顧みる早かったのか永かったのか
毎日がユーモレスクでありたいと心にとめて笑いを求む
緒方　保正

朝夕の涼しい時に草むしり日々の始まり行事となりぬ
動物の知能の高さに驚きぬワイルドライフの動画を見つつ
中原　康子

秋彼岸日頃の沙汰を詫びながら位牌堂にて静かに拝む
社（やしろ）前朝露浴びて生き生きと凛と咲きたる睡蓮の花
三原　光代

甲子園猛暑吹き飛ぶホームラン守りも凄いスーパープレー
球児らの熱き思いの伝わりぬ一途な思い未来を拓くか
橋詰　了一

空間の曲がる理論に魅せられて進路悩みし青春ありき
起きがけの妻の血圧測りつつけふ一日の平穏祈る
堀田　英雄

湯前まんが美術館（那須良輔記念館）設立の頃④

溝下昌美

まんが美術館が開館した平成四（１９９２）年ころは、美術館等は「博物館施設」という意識が強かった。色々な特別展の際は博物館法による登録をしていないと、他館から作品の借り出しができないのでは、という雰囲気があった。すでに登録をされていた八代市博物館や、県教委にご教示を得て翌年、国に博物館登録し、日本博物館協会へ入会した。しかし、現在は「登録博物館」なども形骸化しているといえようか。

やなせ先生と私

平成七年、アンパンマンのやなせたかし先生の展覧会を開催した。先生は那須先生と同じく「まんが集団員」だった。先生はすでに七十代であったが、快活な声で応対してくださった。すると、赤坂でアンパンマンのパーティをするが君も来ないか、といわれた。

ちょうど、作品借用の日と重なり、数百人の無料招待客の一人となった。

杉浦幸雄先生は「こんなことをやるやつは、日本中でも、やなせぐらいだ」とあいさつされた。石ノ森章太郎先生他たくさんの漫画家の先生方にお会いし、営業したつもり。

もちろん、やなせ先生の歌の披露もあった。

先生の地元、四国の当時の高知県香北町にアンパンマンミュージアムを建設され、それを町に寄贈されていた。平成八年にオープン、すると開館シンポがあり、「君も来ないか」と招待された。平成二十五年、九十四歳で逝去された。

恒松正敏氏（湯前にて）

「なんのために生まれて
なにをして生きるのか」

これはアンパンマンのテーマソングであり、ぼくの人生のテーマソングでもある。（やなせたかし著『アンパンマンの遺書』）」

平成十年、人吉高校に勤務されていた前山光則先生からのご紹介もあり、恒松正敏展を開催することになった。前年の十一月、翌年の予定を決めていた時、ちょうど恒松さんから電話があった。すぐ、上京し、「小平のジョンレノン」（現在のイクメンか）こと恒松さんに会った。

そういえば、人高（じんこう）（人吉高校）の時、今年は芸大に三人合格したとか聞いたことがある。その一人が恒松さんだったのだ。

当時、ロックバンド「フリクション」のギターとして名前は知っていたが、そのツネマツマサトシが人吉出身と、誰からか聞いたような気がした。

フリクションについては、昭和五十年当時、埼玉に遊学していた私は、ＵＲＣ（当時の浦和市のロックセンター）の野外コンサートで３／３（さんぶんのさん）というバンドが出ていて、そのギターがレックだったのだ。演奏終了後の笑顔が素敵だった。浦和周辺では安全バンドや四人囃子ともに人気があった。そのレックが結成したのがフリクションだったのだ。

前山先生には県内所蔵家各位の絵

の借用にも同道頂いた。また、何と、有志の方々と恒松さんのコンサートを人吉市内でやることになった。わたしは展覧会よりは、コンサートに夢中になりかけてしまったのを覚えている。

以上、「美術館設立の頃」までを書く予定だったが、開館後まで、になってしまった。

色々な方々に非礼をお詫びしながら、一時、本稿は閉じさせていただきたい。今後とも、湯前まんが美術館に、ご支援、ご声援いただけば幸いである。

【みぞしたまさみ／地域史研究家、球磨郡湯前町】

映画観想記

「おじいちゃん、死んじゃったって。」

久馬　俊

男女のセックス・シーンから物語は始まった。セックス中に電話が鳴って若い女（吉子）は祖父の訃報を知る。吉子は祖父の死を父（清二）に伝えるのだが、清二はすぐ近くの庭先にいるのだった。吉子は父親がすぐ近くにいる場所で昼間にセックスしていたのだ。計算していないが、上映開始から1分前後で、吉子は「おじいちゃん、死んじゃったって」と言う。「セックス中の祖父の死」は、それから、嫌になるほどに、くりかえし登場し、そこになにか意味があるのかと疑問をもたせる。セックスと関連させて本作を記憶する観客もでてくるだろう。

それほどではないが喫煙シーンも多い。清二をはじめとする男たちではなく、吉子をはじめとする若い女たちの喫煙シーンが意図的に強調されている。なぜ、セックスと喫煙か。深く考える必要はないが、気になる人もいるだろう。人の死は人の誕生と連動しているので、祖父の死をセックス（生殖行為）に関係づける人がいるかもしれない。そのように理解してもいいのだが、生殖と関連しない「快楽的行為」としてのセックスが現在では支配的で、両者は必ずしも結びつかない。喫煙を有害とみ、それを死にむすびつけることも不可能ではないが、コンテクスト的には、生殖的セックス以上に無理な理解だ。祖父の死に対して反道徳的なシーンを設定して「死」の一回性・尊厳性を鮮明にしたのだろうと考える人もいるだろう。それをうかがわせるシーンも多く、吉子は祖父の死のときのセックスにこだわっている（自己嫌悪に陥った）が、それを道徳的・倫理的に考え、さらに本作のテーマであるとみるべき必然性・必要性はない。作品を記憶するときの、記憶を喚起するときの措置としてセックスと喫煙が動員されているとみれば十分だろう。

監督：森ガキ侑大
主演：岸井ゆきの（春野吉子役）
脚本：山崎佐保子

キャスト的には吉子が主人公で、登場シーンも多く彼女に焦点が集まっている。しかし物語の中核は吉子の祖父であろう。祖父の妻・ハル（吉子からみれば、おばぁちゃん）、子（吉子からみれば父の清二、伯父の昭雄、叔母の薫）、孫（吉子本人と弟やイトコたち）は、祖父を軸に、役割を与えられている。ハルは認知症に罹患しているが、ハルにとって夫の死はなにを意味するのか。その子はどうか。孫はどうか。吉子は4人の孫の一人にすぎず特別な存在ではない。孫の視点から

親、祖母、祖父をみることも、子の視点から父親、母親、子をみることも、いずれも可能で、それぞれの視点から本作をみていい。「祖父」の死はハルには配偶者の死になり、昭雄、清二、薫にとっては父の死で、吉子たち4人の孫には祖父の死で立つ位置がそもそも違う。細かくいえば、昭雄の元妻（ふみ江）、清二の妻（京子）からの視点もある、配偶者の死のときに認知症になっていたら嫌だろうなといった感想をもつ人もいるかもしれないし、昭雄・清二の世代は他人事ではないと考えるかもしれない。観客はそれぞれの立場で本作を観るだろうし、それでよい。

本作は三世代同居的な大家族制は射程に入っていない。その崩壊が前提で、子の世代の家族つまり核家族を土台にしたうえで、昭雄は離婚し、清二は失業を隠し、薫は未婚という状況に舞台まわしは設定してある。しかし、職業に注目すると農業労働（祖父母の世界）、工場労働（昭雄の世界）、事務労働（清二の世界）、ハイキャリア労働（薫の世界）になっていて時代の変化を巧みに作品に流し込んでいる。それぞれの職業は社会構造のちがいだけでなく時代の変化も示す。昭雄は古典的な意味での工場労働者的に行動し、清二はホワイト労働者的で、薫は最先端労働者的である。しかし、親の死に直面しての行動は末子の薫が「古典的な子」で、次男・清二、長男・昭雄になっていくにしたがって「子的」でなくなる。昭雄世代の「通念」からみると、昭雄の元妻・ふみ江、清二の妻・京子の行動が自然にみえるだろう。男はだらしなく、女はノーマルに行動するという二分法が採用されているかのようにもみえる。祖母ハルとの同居が最初から問題にならず、施設入所が当然視されている点にも注意したい。

本作をみて、伊丹十三「お葬式」（1984年11月17日公開）を思い出す人も少なくないだろう。同作で伊丹はセックスと笑いを作品に取り入れたのであった。本作にも両者の要素が含まれている。人の死をかたるとき、セックスと笑いは不可欠ということであろうか。

【きゅうま・すぐる／八代市】

俳句大学 Haiku University

今月の秀句 Selected Haiku of this Month

永田満徳選評・向瀬美音訳

このコーナーは、「二行書きによる〈切れ〉と〈取り合わせ〉を取り入れたHaiku」を提案している『俳句大学』facebookページからの転載です。

https://www.facebook.com/groups/1805562046390300/

Haiku Column ❾

Nadine Leon

●

fleurs de topinambour
sous terre la mémoire de la guerre

【Commentaire de Mitsunori NAGATA】
Aux endroits où il y a eu des batailles historiques pendant les guerres, le sang a coulé, on y cultive maintenant les fleurs de topinambour. Réflexion pénétrante.

ナディン　レオン

●

菊芋の花
土の下には戦争の歴史

〔永田満徳評〕
かつては血を血で争う戦地であり、戦争の歴史が埋もれているところに食用の菊芋が栽培されているという認識は鋭い。

Danièle Duteil

●

réunion de travail
la porte baille

【Commentaire de Mitsunori NAGATA】
Là où l'on discute d'une accumulation de problèmes liés au travail, on pense que cela peut durer longtemps. L'atmosphère stérile et ennuyeuse est personnifiée par la porte qui baille. C'est très intéressant.

ダニエル　ドウトイユ

●

労働集会
ドアはあくびをする

〔永田満徳評〕
課題山積の労働問題を話し合う集会。延々と続くかに見える、その不毛で退屈な様を「ドア」で擬人化したところが面白い。

Anne-Marie Joubert-Gaillard

●

Roman
Le rythme de son coeur ralentit

【Commentaire de Mitsunori NAGATA】
Le cours du temps passe tranquillement quand on lit un Roman, elle a senti le rythme du cœur qui ralentit, on éprouve parfaitement de la sympathie pour elle.

アンヌ　ジュベールガヤール

●

長編小説
彼の心臓のリズムはゆっくり

〔永田満徳評〕
長編小説を心ゆくまで読み耽っている時の、ゆったりとした時間の流れを心臓の刻むリズムに感じたところは共感できる。

【ながた・みつのり／俳人協会会員、熊本市】

くまがわ学習塾 ⓫

問１　球磨川の瀬の名前を書け。（例：二股の瀬）

①（　　）
②（　　）
③（　　）
④（　　）
⑤（　　）
⑥（　　）
⑦（　　）
⑧（　　）
⑨（　　）
⑩（　　）

問２　球磨川流域の古墳名を書け。（例：亀塚古墳）

①（　　）
②（　　）
③（　　）
④（　　）
⑤（　　）

問３、自治体の鳥の名前を書け。（例：五木村（メジロ））

①水上村（　　）
②多良木町（　　）
③錦町　（　　）
④山江村（　　）
⑤相良村（　　）
⑥人吉市（　　）
⑦球磨村（　　）
⑧芦北町（　　）
⑨八代市（　　）
⑩あさぎり町（　　）

問４、写真をみて問い答えよ。

①祭り名を答えよ

答（　　）

②ダムの名前を答えよ

答（　　）

③観音像の名前を答えよ

答（　　）

※答え合わせは次号でおこないます。前回の答え合わせは 87 頁で。

★全問正解者には抽選で弊社の書籍をプレゼントします。ハガキ又は封書で弊社まで解答をお送りください。

くまがわ狂句

村上鬼拳

二人は若い　エラーも有って当たり前
二人は若い　逆境だって跳ね返す
雨の音　またストレスの溜まりそう
雨の音　明日は本がお守りしゅう
やかましさ　僕ばこうての嬌声か
よかなぁ　茶飲み相手の見つかって
落第かも　弟がさぞ威張るどう
荒れ模様　社内イ避雷針の要る
うーん　とても贋作てにゃ見えん
お触るな　鮮度の落ちて嫁られん

【むらかみ・きけん／人吉市】

新年のごあいさつ　各種書式取り揃えております。

年賀状印刷承ります

年賀状持ち込み歓迎！

喪中・欠礼はお急ぎください

【ご注意！】平成30年の年賀ハガキを52円で差し出すことができる期間は2017年12月15日（金）～2018年1月7日（日）です。それ以外の期間は追加で10円切手を貼る必要があります。

印刷料金（税込・はがき代別）	
10枚 2,880円	70枚 5,050円
20枚 3,180円	80枚 5,440円
30枚 3,490円	90枚 5,820円
40枚 3,880円	100枚 6,200円
50枚 4,270円	150枚 7,990円
60枚 4,660円	200枚 9,690円
以後は1枚20円アップ	

人吉中央出版社　TEL23-3759

※モノクロ印刷は２割引きです。

問４、写真をみて問い答えよ。

①行事名を答えよ　　答（　**七夕綱**　）

亀田英雄「木々子の七夕綱」本誌第６号 14 頁、坂本桃子「それぞれの想い、それぞれの七夕綱」本誌 18 号 4 頁以下参照。後者は、①八代坂本町木々子地区、芦北町祝坂地区、下白木地区の七夕綱を比較分析している点、②七夕綱の由来について概括的説明を加えている点、③国の制度としての「無形文化財指定」を住民の視点で捉え直している点で画期的論考である。★今年は「七夕綱」の当日に台風襲来という状況があった。祝坂地区、下白木が台風にどのような対応したかについては坂本論考を是非読んでいただきたい。木々子地区はどう対応したか。同地区は対外的に延期の措置をとると同時に地区自体では例年通りに七夕綱を張った。俗的にいえば、伝統を維持しつつ、「見せ物」としての七夕綱も実施したのである。木々子地区は外部の人が七夕綱に関心を寄せることを歓迎し、８月６日以外にも、外部の人と一緒に綱をつくり、それも飾る。すべてを伝統的な場所・中谷川に飾れないので、八代博物館、坂本駅、八代駅、坂本町の温泉センター〈クレオン〉でも飾っている。

②古墳名を答えよ　　答（　**大村横穴古墳群**　）

1916 年（大正５年）５月 27 日前後に下林繁夫が発見した。当時、下林は 30 歳。人吉駅のプラットホームにたち、北側の台地をみて「横穴のごたる」と感じて、急いで目的地に向かい横穴古墳群をみつけた。下林の発見は同年５月 30 日付九州日日新聞に掲載された。その日、人吉の旅館に角田政治は泊まっていて、その記事をみて、直ぐに人吉駅裏に向かい不思議な文様を発見した。角田の発見は同年６月１日付九州日日新聞に掲載された。現在、整備されているが、以前は、藪と草でおおわれた荒地だったようである。当時、角田は 45 歳。６月１日付の記事で、角田は同発見を球磨にも大和民族が居住していたことを説明する大発見と書いている。木崎康弘『肥後と球磨　その原史世界に魅せられし人々』（人吉中央出版社）457 頁以下参照。

③施設名を答えよ　　答（　**安養寺**　）

森山学「安養寺をあるく」本誌 18 号 32 頁以下参照

⑤マルクス『資本論』は大政奉還より先に刊行された。○

資本論第１巻初版の発行は 1867 年９月 14 日、慶喜の大政奉還は同年 11 月９日である。日本で封建制の崩壊がはじまりかけていたとき、西欧では資本主義の矛盾・限界を自覚する動きがはじまっていた。資本論の日本への導入・普及史は重要な課題であるが、ここでは省略せざるをえない。ついでながら漱石も英語版資本論を購入している。独力したかは不明である。否定説が有力である。

⑥西郷隆盛は、西南戦争のとき、球磨川を利用して八代にむかった。○

⑦横井小楠は学校党の代表者である。✕

学校党でなく、実学党の代表者である。

⑧漱石の妻・鏡子は日奈久温泉に行ったことがある。○

⑨悟真寺（八代市）には河童伝説がある。○

光永了円「河童の供養」本誌第６号 22 頁、森山学「悟真寺御霊殿を歩く」本誌 15 号 36 頁参照。江上敏勝『ふるさと百話　総集編』（八代青年会議所　1983 年）によれば、次のような伝承が残っている。悟真寺の開山大原孚芳和尚が、ある夜、厠で用をたしていると、いやな感じの手が伸びてきて和尚の尻に触った。和尚はその手を折り取って、よくよく見ると河童の手であった。翌日から、毎晩、片腕のない美女が和尚のところへやってきて右手を返してくれと泣いて頼んだ。美人だし、哀れでもあるので、和尚は近くの川で遊ぶ子どもや紙漉きの仕事をする人を殺めてはならない、この約束を守れば５月５日にお前の好きな物を川（中宮川）に流してやろうと伝え、片腕を返した。以降、水難事故は起きていない、というものである。片腕喪失の物語であるから、系譜的には、菅原道真に由来する河童伝説に属する。

⑩料理研究家・故江上トミはカレーライスを食べたことがない。✕

故江上トミ（芦北町出身）は、テレビ番組で、カレーを家庭料理として紹介したことで有名。江上の弟・藤崎彌熊は妻ツネを同行しイギリスに留学した（昭和３年）が、そのとき、ツネはカレーのレシピをイギリスから持ち帰り、江上トミはツネのレシピを参考にしてカレーを普及させたのであった。ツネのレシピは現存していて、そのレシピ通りにつくったカレーを赤松館に隣接する「カフェ米蔵」で限定販売している。レシピは小さな字でノートに詳細に書いてある。夏に当該カレーをいただいたが玉ねぎの甘みを活かした美味しいカレーであった。「カフェ米蔵」は藤崎家の旧米蔵内にあるが、米蔵は以前は別の場所にあった。「カフェ米蔵」は毎日開店しているわけでなく、ツネのカレーをいつも提供しているわけではないので、ツネのカレーを味合うためには事前に調べておく必要がある。ついでながら、カレーを日本に最初に紹介したのは福沢諭吉だが、彼自身はカレーを食したことはない。

前号【くまがわ学習塾⑩の答え】

問１　球磨川流域にある高校名をあげよ。（例：八代高校）

① 八代東高校
② 八代工業高校
③ 八代清流高校
④ 白百合学園高校
⑤ 秀学館高校
⑥ 人吉高校
⑦ 球磨工業高校
⑧ 球磨中央高校
⑨ 多良木高校
⑩ 南稜高校

問２　球磨川本流にかけられている橋の名前をあげよ。（例：水ノ手橋）

① 大野大橋
② 萩原橋
③ 西部大橋
④ 鎌瀬橋
⑤ 人吉橋

問３、○か×で答えよ。

（例：小山勝清は錦町出身である。　✕　★正解は「相良村出身」）

①重盤岩眼鏡橋は芦北町にある。✕

「津奈木町」にある。本誌 11 号７頁以下参照。

②瀬戸石ダムは芦北町と球磨村の両者にある。○

③エンブリー夫妻は帰国後に離婚した✕

離婚したわけではない。ジョンの事故死（1950 年 12 月 22 日）によってエラは未亡人になった。ジョンの事故死から５年後の 1955 年、フレデック・ウイズウエルとエラは再婚した。本誌 15 号２頁以下参照。

④日本考古学の父・濱田耕作は人吉にきたことがある。○

木﨑康弘著『肥後と球磨　その原史世界に魅せられし人々』（人吉中央出版社）475 頁以下参照。濱田は有名な「タジタジ事件」の主人公である。

編集後記

来年は、明治改元から150年目に当たるため、政府や地方自治体では「明治150年」を謳ったイベントが数多く準備されているという。地方自治体では、明治維新ゆかりのスポットを観光客誘致に最大限活用するといった「地方創生」戦略の一環という面を打ち出すであろう。★本誌もこれにあやかり、流域での資本主義社会への移行の一端を坂本の製紙工場の歴史から探る企画を立てた（12頁）。★最近は取材に出かけることが多くなり、前号でもお伝えした「さかもと国際児童画展」開幕の様子も取材した（3頁）。世界の子どもたちの笑顔に会うために是非、足を運んでいただきたいと思う。★その坂本での出来事であるが、児童画展のオープニングセレモニーの最中に突然、消防車・救急車のサイレンが鳴り響いた。この時は不吉な予感がしたが、幸い被害は小さかったようで一安心。その肥薩線の踏切事故の様子も急きょ掲載したのでご一読を。（ま）

〒868―0015
熊本県人吉市下城本町1436―4の3号
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部
info@hitoyoshi.co.jp
電話・ファックス 0966・23・3759

インフォメーション

開催中

▽「さかもと国際児童画展」（～19日、八代市坂本町7施設）

11月18日（土）
▽人吉市東西コミセン短期講座「歴史探訪」（同コミセンスタート・ゴール）

11月19日（日）
▽宮園大イチョウ祭り（五木村宮園）
▽人吉球磨「バルウイーク」（～26日、人吉球磨の飲食店）
▽やまえ産業振興まつり（山江村役場前広場）

11月22日（水）
▽八代妙見祭（～23日、妙見宮及び市内一円）

11月23日（木・勤労感謝の日）
▽第71回犬童球渓音楽祭「音楽のひろば」（人吉市カルチャーパレス）

11月24日（金）
▽人吉労音例会「水谷川優子チェロリサイタル」（人吉市カルチャーパレス）

11月26日（日）
▽第15回あさぎり町内一周駅伝大会（免田総合体育センタースタート・ゴール）

11月29日（水）
▽第12回合唱祭くまがわ（あさぎり町須恵文化ホール）

11月30日（木）
▽求麻郷土研究会11月例会「第38回庚申祭」（あさぎり町免田遍照寺）

12月3日（日）
▽ひとよし・くま市民劇場例会「俳優座『十二人の怒れる男たち』」（人吉市カルチャーパレス）

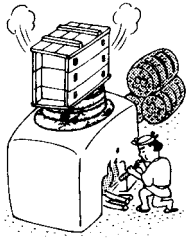
▽第50回人吉市歳末たすけあい演芸会（人吉市カルチャーパレス）

TAKEDA Eye Clinic
たけだ眼科クリニック
院長 竹田 憲司
人吉市南泉田町39 ☎23-3096

めがね・コンタクトレンズの
アイ ウェア槇（まき）
（たけだ眼科ビル内）☎0966-23-3097

デイサービスセンター いずみ
ケアプラン作成所いずみ（居宅介護支援事業所）
協力医療機関 たけだ眼科クリニック
人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307

匠の技



御膳醤油
（だし入り万能しょうゆ）
・玉子かけご飯
・豆腐
・お刺身に
300ml 650円（税抜）

◆納豆みそ
477円（税抜）

◆納豆みそ
（お徳用）
300円（税抜）

◆みそ煎餅
477円（税抜）

人吉散策コース 九州相良 蔵めぐり
みそ・しょうゆ蔵

資本会社 釜田醸造所
マルカマ
会長 釜田元嘉
社長 釜田顕
〒868-0001 熊本県人吉市鍛冶屋町16
電話（0966）22－3164
FAX（0966）22－3165
メール info@marukama.co.jp